

# 千葉市和唐地遺跡

— 宅地造成に伴う埋蔵文化財調査報告書 —

2024

有 限 会 社 開 成  
千 葉 市 教 育 委 員 会  
株 式 会 社 ノ ガ ミ

わとうじ  
千葉市和唐地遺跡

— 宅地造成に伴う埋蔵文化財調査報告書 —

2024

有 限 会 社 開 成  
千 葉 市 教 育 委 員 会  
株 式 会 社 ノ ガ ミ

## 例言

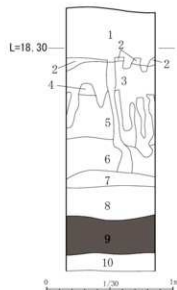
- 1.本書は、千葉市中央区星久喜町938外における宅地造成に伴う和唐地遺跡の発掘調査報告書である。
- 2.発掘調査及び整理作業は千葉市教育委員会が主体者となり、有限会社開成の委託を受けた株式会社ノガミがこれを支援した。
- 3.発掘調査の期間・面積・担当者は下記のとおりである。  
期間：令和4年（2022）12月8日～令和5年（2023）5月24日  
面積：3,400㎡／8,609.84㎡  
担当者：木口裕史（千葉市埋蔵文化財調査センター 主任主事）  
調査員：長谷川秀久（株式会社ノガミ 埋蔵文化財調査部 調査員）
- 4.整理作業及び報告書作成は長谷川が担当し、長谷川則子の協力を得た。
- 5.整理期間は令和5年5月25日から6年2月29日までである。
- 6.写真撮影は遺構・遺物とも長谷川秀久が行った。第1号竪穴住居跡出土土器集合写真と第4号竪穴住居跡出土絵画土器4の外側展開写真と内面写真は有限会社スギハラ（杉原寛大）が撮影した。
- 7.本書の執筆は第1章第1節を木口が行い、第1章第2節と付載は菊池健一氏、第2章第1・2節の石器は川端弘士・川端結花両氏の玉稿を賜った。その他の執筆と編集は長谷川秀久が行った。
- 8.出土資料・調査記録等は千葉市埋蔵文化財調査センターで保管・管理している。
- 9.発掘調査から報告書刊行まで、次の方々や諸機関のご指導・ご協力を賜った。なお、石器の所見・実測図・写真は川端弘士・川端結花両氏からご提供賜った。縄文土器については齋藤弘道氏にご指導、ご教示を賜った。また、第4号竪穴住居跡から出土した絵画土器に関連して、菊池健一氏から玉稿を賜った。ご芳名を記して感謝の意を表します。  
鈴木 徹 有限会社小川重機 株式会社トキワ 株式会社マツイ商会

## 凡例

1. 本書に使用した座標は世界測地系に基づく平面直角座標IX系で、挿入中の方位記号は座標北を示す。  
また、土層断面図等で使用した標高の基準面は、T.P. (Tokyo Peil / 東京湾平均海面) である。
2. 土層注記及び土器の色調判別は、『新版 標準土色帖』1993年版 (農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所 色票監修) を基本とした。
3. 挿入等に用いた遺構の略記号は下記のとおりである。  
竈穴住居跡: SI、土坑: SK、ピット: P、古墳: SZ、溝跡: SD、道跡: SF、不明遺構: SX、攪乱: K
4. 本書で使用した地形図は、国土地理院発行 (平成31年2月調整) 2万5千分の1地形図『千葉東部』及び2,500分の1千葉市都市図 (令和2年3月調整) 22-16を使用した。
5. 遺物写真の縮尺は土器を3分の1、石器を2分の1で掲載した。異なる場合は個別に示した。
6. 土器観察表の凡例は以下のとおりである。  
「残存」 分数は円周上の残存割合を示す。  
「法量」 単位は cm、g。口径・底径は上下端部で計測、丸い外反形状では外端部で計測した。  
( ) は復元値、( ) は残存値を示す。  
「胎土」 含有物を示す。骨針: 海綿骨針、角: 角閃石、バ: パミス、白: 白色粒子 (半透明粒子含む)。石英あるいは長石)、透: 透明粒子 (石英)、黒: 黒色粒子 (不明)、赤: 赤色粒子 (褐鉄鉱ほか)、黄: 黄褐色土粒子 (土器状あるいはスコリア)、チャ: チャート、砂: 不明鉱物、(多): 含有量多量。肉眼による表面観察であるので、含有量は多量のみ示した。  
「焼成」 掲載した土器はすべて焼成良好であるので省いた。  
土器属性表の法量の単位は mm、g である。
7. 遺物の注記は、調査年度「R4」- 遺跡名「ワトウジ」- 遺構記号番号- 出土箇所・取り上げ区別・点上げ番号、の順で表記してある。

### 基本土層

- 1層 10YR4/4暗褐色土 ローム転とロームブロックを多量含む。ややしまりあり、粘性あり。新緑テフラ層。II層相当
- 2層 10YR4/6褐色土 暗褐色土をブロック状に含む。ややしまりあり、やや粘性あり。ソフトローム層
- 3層 10YR4/6褐色土 暗褐色土を細ブロック状に少量含む。下層ではハードロームブロックを中量含む。ややしまりあり、粘性あり。ソフトローム(II層)
- 4層 10YR4/6褐色土 褐色テフラと黒色スコリアを多量含む。しまり強。ハードローム層
- 5層 10YR4/6褐色土 褐色テフラを極多量含む。黒色スコリア中量・赤褐色スコリアを微量含む。灰白色テフラを微量含む。しまり強・AT層 第4層よりやや明るい
- 6層 10YR4/6褐色土 黒色スコリアを微量含む。赤褐色スコリアを極微量含む。5層よりやや暗い。
- 7層 10YR4/6褐色土 褐色テフラを多量含む。赤褐色スコリアを少量含む。
- 8層 10YR4/4褐色土 褐色テフラを極多量含む。黒色スコリアと赤褐色スコリアを極多量含む。埋積相当か
- 9層 10YR4/4暗褐色土 褐色テフラを多量含む。赤褐色スコリアを極多量含む。IX層相当か(第二黒色帯)
- 10層 10YR4/4褐色土 褐色テフラを中量含む。しまり強



# 本文目次

## 例言・凡例・目次

### 第1章 調査と遺跡の概要

第1節 調査に至る経緯	1
第2節 遺跡の位置と周辺の遺跡	1
第3節 調査の方法と経過	2

### 第2章 検出した遺構と遺物

第1節 縄文時代	
(1) 遺構外出土遺物	9
第2節 弥生時代	
(1) 竪穴住居跡	11
(2) 環濠跡	18
第3節 古墳時代	
(1) 竪穴住居跡	21
(2) 古墳(和唐地古墳)	25
(3) 遺構外出土遺物	27
第4節 時期不明の遺構(土坑・ピット以外)	
(1) 不明遺構(円形周溝状遺構)	27
(2) 道跡	27
第5節 土坑・ピット	27

### 第3章 まとめ—調査の成果と課題—

### 付載 第4号竪穴住居跡出土絵画土器について

写真図版・報告書抄録

# 挿図目次

図1 周辺遺跡位置図	2	図16 環濠跡出土遺物	18
図2 調査区位置図	4	図17 環濠跡(1)	19
図3 全体測量図(1)	6	図18 環濠跡(2)	20
図4 全体測量図(2)	7	図19 第1号竪穴住居跡	21
図5 全体測量図(3)	8	図20 第1号竪穴住居跡 遺物出土状況図	22
図6 縄文時代遺構外出土遺物	9	図21 第1号竪穴住居跡出土遺物	23
図7 第2号竪穴住居跡	12	図22 古墳(和唐地古墳)	24
図8 第2号竪穴住居跡出土遺物	13	図23 古墳(和唐地古墳)埋葬施設	25
図9 第3号竪穴住居跡	14	図24 古墳出土遺物	26
図10 第3号竪穴住居跡出土遺物	15	図25 古墳時代遺構外出土遺物	27
図11 第4号竪穴住居跡	16	図26 土坑出土遺物	28
図12 絵画土器・鉢3・4出土状況図	16	図27 唐古・縄遺跡22次SK-101 絵画土器001	39
図13 第4号竪穴住居跡焼土セクション	16	図28 千葉市本郷向遺跡例	40
図14 第4号竪穴住居跡出土鉢4の線刻画	17	図29 第4号竪穴住居跡出土鉢4の線刻画の各意匠	41
図15 第4号竪穴住居跡出土遺物	18		

# 表目次

表1 石器属性表	10	表3 土坑一覧表	34
表2 出土遺物観察表	32	表4 ピット一覧表	36

## 写真図版目次

写真図版 1		
1. 調査風景 (第1号竪穴住居跡)		
写真図版 2		
1. 調査区全景	(上が北)	
写真図版 3		
1.SI01 遺物出土状況	(南東から)	
2.SI01 A セクション	(西から)	
3.SI01 遺物出土状況	(北東から)	
4.SI01 完掘状況	(南東から)	
5.SI01 P1 セクション	(北東から)	
写真図版 4		
1.SI02 完掘状況	(南東から)	
2.SI02 セクション	(北から)	
3.SI02 遺物出土状況	(東から)	
4.SI02 P2 完掘状況	(南東から)	
5.SI02 炉 遺物出土状況	(南から)	
写真図版 5		
1.SI03 完掘状況	(南東から)	
2.SI03 B セクション	(南東から)	
3.SI03 遺物出土状況	(東から)	
4.SI03 P1 完掘状況	(南東から)	
5.SI03 P2 完掘状況	(南東から)	
写真図版 6		
1.SI04 完掘状況	(南東から)	
2.SI04 遺物出土状況	(北東から)	
3.SI04 P1 完掘状況	(西から)	
4.SI04 絵画土器(南群) 出土状況	(北東から)	
5.SI04 絵画土器(北群) 出土状況	(北東から)	
写真図版 7		
1.SD01 完掘状況 (C区。左手は SI04)	(北西から)	
2.SD01 高杯5出土状況	(南から)	
3.SD01 G セクション	(南東から)	
4.SF01 検出状況	(南東から)	
5.SX01 完掘状況	(北西から)	
写真図版 8		
1.SZ01 完掘状況	(上が北)	
2.SZ01 完掘状況	(上が南)	
写真図版 9		
1.SZ01 周溝 B セクション 北東	(西から)	
2.SZ01 周溝 B セクション 南西	(南東から)	
3.SZ01 周溝 B セクション 南西	(北西から)	
4.SZ01 周溝 C セクション 北西	(北東から)	
5.SZ01 埋葬施設 木棺掘方完掘状況	(西から)	
6.SZ01 主体部 B セクション南半	(南東から)	
7.SZ01 埋葬施設墓竪完掘状況	(西から)	
写真図版 10		
1.SK01 セクション	(南東から)	
2.SK01 完掘状況	(南西から)	
3.SK03 セクション	(東から)	
4.SK03 完掘状況	(南から)	
5.SK08 セクション	(北西から)	
6.SK08 完掘状況	(南西から)	
7.SK14 セクション	(南西から)	
8.SK14 完掘状況	(東から)	
写真図版 11		
1.SK41 セクション	(西から)	
2.SK41.42 完掘状況	(南から)	
3.SK88 セクション	(南から)	
4.SK88 完掘状況	(東から)	
5.SK103 セクション	(南から)	
6.SK103 完掘状況	(東から)	
7.SK151 セクション	(北西から)	
8.SK151 完掘状況	(南西から)	
写真図版 12		
1.SK153 セクション	(南東から)	
2.SK153 完掘状況	(北から)	
3.SK162 セクション	(西から)	
4.SK162 完掘状況	(南から)	
5.SK163 セクション	(南西から)	
6.SK163 完掘状況	(南から)	
7.SK164 セクション	(南から)	
8.SK164 完掘状況	(南から)	
写真図版 13		
1.P7 セクション	(南西から)	
2.P7 完掘状況	(南から)	
3.P21 セクション	(南西から)	
4.P21 完掘状況	(南から)	
5.P33 セクション	(南から)	
6.P33 完掘状況	(南から)	
7.P65.66 セクション	(北東から)	
8.P66 完掘状況	(北から)	
写真図版 14		
1.P118 セクション	(北東から)	
2.P118 完掘状況	(南から)	
3.P184 セクション	(南東から)	
4.P184 完掘状況	(南から)	
5.SK13 遺物出土状況	(南から)	
6.SK13 セクション	(東から)	
写真図版 15		
7. 基本層序	(西から)	
縄文時代土坑出土遺物		
縄文時代遺構外出土遺物		
SI02 出土遺物 (1)		
写真図版 16		
SI02 出土遺物 (2)		
写真図版 17		
SI03 出土遺物		
SI04 出土遺物		
環濠跡出土遺物		
写真図版 18		
SI01 出土遺物		
古墳(和唐地古墳)出土遺物		
古墳時代遺構外出土遺物		
奈良時代土坑出土遺物		

## 第1章 調査と遺跡の概要

### 第1節 調査に至る経緯

令和4年4月12日付けで有限会社開成より、宅地造成計画に掛かる埋蔵文化財保護法第93条に基づく届出が提出された。事業範囲は和唐地遺跡および琵琶首台遺跡にまたがる範囲であったが、試掘調査の結果、和唐地遺跡に掛かる範囲において、古墳時代の竪穴住居跡を確認したため、令和4年5月12日付け「4千教理セ第26号」にて工事着手前に確認調査を実施するよう通知した。

確認調査は令和4年7月14日から同年8月15日の期間で実施され、古墳時代の竪穴住居跡3軒、円形周溝墓1基、溝状遺構2条、時期不明土坑数基が確認された。これによって、事業範囲8,609㎡の内、3,300㎡が本調査対象範囲とされた。

その後、事業者より本調査対象範囲について発掘調査依頼が提出され、事業者からの委託を受けた株式会社ノガミの支援のもと、千葉県教育委員会が主体者となり、令和4年12月8日から令和5年5月22日まで発掘調査を実施した。

### 第2節 遺跡の位置と周辺の遺跡

和唐地遺跡の所在する千葉市は千葉県庁所在地であるとともに、貝塚のまちとして知られている。本遺跡の周辺には特別史跡加曽利貝塚をはじめ、国指定史跡の月の木貝塚、花輪貝塚、荒屋敷貝塚がある。

本遺跡は市域中央部にあり、最も広い流域面積を占める都川水系の downstream 左岸（南岸）に位置する。千葉市中央区の市街地を乗せる都川の広い沖積低地に臨む台地北縁近くにあつて、標高16～18mほどを測る。遺跡地の東西には谷津が入り、東の星久喜遺跡、西の矢作三山塚遺跡が乗る台地と画されている。

この辺りは律令制下には千葉郡池田郷の一部に比定され、都川対岸の台地は糟口（くさかんむりに依。かそり）郷と考えられる。南の上総国府から下総国府へ向かう沿海幹線道と、印旛沼東岸を経て香取の海、霞ヶ浦経由で常陸国府へ向かう内水面を通る幹線道の分岐点付近と言われ（武田ほか1984）、古来より頻繁な往来を思わせる（黒川1979）。

今回の調査では縄文・弥生・古墳時代、平安時代の遺物が検出されたが、主要な集落遺構を確認した弥生時代と古墳時代に絞って、本遺跡周辺の動向を概観しておく。

**弥生時代** 台地西端の猪鼻城跡（田中2007）では中・後期の竪穴住居跡が発見されており、調査成果を踏まえた近年の研究では、中期宮ノ台式の段階に遠く中部高地・関東北西部の系譜を引く土器があることが明らかになっている（小林2022）。なお、この地区では今回、調査されたような小環濠集落は見当たらない。

東側では星久喜遺跡（山本編1984）、支川都川右岸の城之越遺跡で弥生時代中期から古墳時代にかけての集落・墓域が調査されている。また、南方の荒久遺跡（萩原1991）、地藏山遺跡（渡辺1992）等の千葉寺地区遺跡群でも同時期の資料が明らかになっている。

都川の対岸では、辺田遺跡で弥生中（～後）期の方形周溝墓が確認されている。やや上流に再葬墓が検出された新田山遺跡（小林2023）が杉原荘介氏の調査以来注目され（渡辺2004）、葭川の中流域に同じく再葬墓と考えられる壺が出土した南屋敷遺跡がある。中・後期では東関東系の住居跡等が確認された車坂遺跡（武田ほか1974）、東田遺跡（同）、石神遺跡（中村1968、沼澤ほか1977）、戸張作遺跡（菊池1988・89）があり、戸張作遺跡では中期の小規模環濠集落が発見されている。東田遺跡と石神遺跡、戸張作遺跡が後期に共存したのであれば、南関東系土器を使う集団と東関東系土器を使う集団の棲み分け



図1 周辺遺跡位置図

- 【凡例】
- 弥生集落
  - 弥生・古墳集落
  - ◇ 古墳集落
  - △ 古墳

0 1/25,000 1km



がなされた可能性も指摘できる。

**古墳時代** 都川下流域には多くの集落遺跡が分布する。谷津をはさんだ東の星久喜遺跡、西の矢作三山塚遺跡があり、ともに発掘調査されている。星久喜遺跡の前期集落は顕著で、20軒以上が確認されている。また、先に述べた石神遺跡、戸張作遺跡等の他に、立木南遺跡（菊池ほか1988）等で古墳・集落跡の調査が進められ、古山遺跡（加曾利貝塚と谷津をはさんで南隣。田中・菊池1990）の堅穴住居跡から鉄屑とともに三角板草綴の三角板などが出土していることも注目される。

墳墓は星久喜遺跡で出現期方墳が2基確認され、うち1基からは畿内系譜の壺を発見、市域最古の古墳とみられている。都川対岸の辺田遺跡でも方墳（方形周溝墓）1基が調査されている。前期古墳も都川水系では踏形遺跡・戸張作遺跡・石神遺跡・姫宮遺跡で確認されており、いずれも方墳である。中期古墳も南方のおゆみ野地区ほどではないが確認されている（石神遺跡・東田遺跡・坊屋敷遺跡）。中でも、石神遺跡2号墳は長大な粘土椀に二組の石枕・立花が配置され、副葬された石製・鉄製製造品など標識的な資料となっている。しかし、墳丘規模は直径25mの円墳と小型である。市域の中期古墳は「単時にせよ小規模に群集するにせよ、際立って目立つ古墳は少ないと考えてよい」とされ（長原2009）、今回確認した本遺跡SZ01も丘陵頂部の単独墳であるが低墳丘の小型墳である。

また、古墳時代以降の製鉄遺構が千葉寺地区遺跡群の山ノ神遺跡などで確認されていることも注目される。後の律令制下で都ぶりが見られる大北遺跡（萩原1986）や千葉寺遺跡を成立させる基盤となる地域と考えられ、今後、更なる地域研究が期待される地域である。

### 第3節 調査の方法と経過

**発掘調査** 調査区は確認調査結果により設定された北東方向から南西方向へ最大約70.3m・北西方向から南東方向へ最大約58.6mであり、面積は3,400㎡である。表土の掘削及び排土はバックホー（0.4㎡、文化財仕様バケット）とクローラーダンプ（0.45㎡）を用いて、排土は事業地内に仮置きしながら北東側より作業を進めた。

調査区全体を網羅するように世界測地系第IX系に基づいて10m方眼グリッドを設け、補足として任意杭を打設した。ベンチマークは調査区内の南東壁中央に1か所（T1 標高17,791m）・北東壁南西端部に1か所（T2 標高17,988m）・北西壁中央に1か所（T3 標高18,000m）の3か所に設置した。方眼グリッドには西から東へ算用数字（1～8）を、北から南へアルファベット（A～I）を付した。各グリッドの呼称は北西角の杭名を適用する。

遺構確認は基本層序第3層・新規テフラ中層とした。遺構確認は鋤簾を用いて精査を行い、遺構の切り合いに留意しながら遺構プランをマーキングした。主軸方向や切り合い関係に留意して土層観察用の畔（セクションベルト）を設け、移機鏡を用いて調査した。遺物は遺構ごとに出土位置を記録して取り上げた。堅穴住居跡はセクションベルトで4分割して主軸方向から時計回りに番号を付し（1～4区）、微細な遺物は区画ごとに一括して取り上げた。遺構の測量は平板測量とレベル測量を行った。縮尺は遺構確認図を100分の1、遺構平面図は20分の1を基本とし、必要に応じて10分の1、環壕と古墳墳丘は40分の1で作図した。

写真撮影は写し込み台帳を作成して基本写真台帳とし、2,426万画素のフルサイズデジタルカメラを用いた。

**整理作業** 遺物の注記はポスターカラーを用いて手書きにて行った。土器の接合にはセルロース系接着剤（セメダインC）を用い、補強にはエポキシ系樹脂（バイサム）を用いた。遺物の実測は手測りで行った。作成した遺構図、遺物実測図はAdobe Photoshop CCへ書き込み、Adobe Illustrator CCを用いてデジタ



図2 調査区位置図

ルトレースした。遺物の写真撮影は2,426万画素のフルサイズデジタルカメラを用いて撮影、一部、撮影業者に依頼した。

**調査の経過** 以下、発掘調査の経過を日を追って記す。

12月8日 市教育委員会とともに調査区の設定を行う。

12日 安全柵の設置を行う。重機の搬入を行い表土除去を開始する。便宜上北東側より開始する。

26日 発掘機材の搬入を行う。表土除去作業の継続。調査区北西部に3軒の竪穴住居跡のプランを確認する。ほか、土坑及びピット群のプランを確認した。

28日 明日からの正月休みに備え、調査区及び休憩所テントの養生を行う。

1月6日 調査を再開する。作業員着任。調査区東側の大型攪乱を精査し、木根の除去作業を行う。

12日 表土除去作業を終了し、重機の搬出作業を行う。古墳の精査作業から着手。プラン確認を行う。12m級の円墳と思われる。

19日 古墳の表土廃土を終了する。墳頂部に主体部と思われるプランを確認した。周溝の掘削を行う。周溝の断面形は逆台形状である。

24日 古墳周溝の掘削を終了し、周溝の断面観察を行う。底部に堆積した自然堆積土の上部に墳丘崩落土が流入した様相が伺える。

26日 調査基準杭の打設を行う。遺構確認作業を継続する。

31日 遺構確認を終了し、遺構精査作業に着手する。調査区の北西方向から南東方向に分断する溝に5か所のトレンチを設け精査を行う。

2月3日 溝のトレンチ調査を継続する。東側では葉研状断面と思われた溝であるが、西側ではV字状となる。台地を分断する環濠であることが判明する。

10日 調査区北西部に位置する3軒の竪穴住居跡に重複する土坑の調査を終了し、住居跡の調査に着手する。SI01から着手する。

16日 住居跡の精査を継続する。SI01は消失住居であり、おびただしい焼土が床面に確認された。出土遺物から古墳時代前期の所産と思われる。古墳主体部に4本の土層観察用ベルトを設け精査に着手する。

20日 住居跡の精査を継続する。SI02とSI03は比較的大型の平面形隅丸方形の住居跡である。出土遺物から弥生時代中期の所産と考える。

3月1日 土坑・ピットの精査に着手する。便宜上北東側から着手する。便宜上、クローラーダンプを用いて廃土する。

9日 環濠・SD01の掘削に着手する。土量に配慮し出土遺物に留意しながら上層は重機にて掘削することとした。

16日 環濠が北西調査区外に延びることから、調査区を約100㎡拡張することとなる。

17日 SI01～03の完掘調査を完了。SI04は環濠の重複部分の調査終了を待って着手することとした。土坑及びピットの調査を継続する。

30日 SI04の精査に着手する。SI04は環濠に削平された弥生時代中期の所産と考えたい。土坑及びピットの精査を継続する。

4月7日 SI04のおびただしい焼土の断面観察を行う。焼土は投棄されたものではなく住居の焼失に由来するものであることが分かる。土坑及びピットの精査作業を継続する。

15日 SI04の調査は掘方調査を残し終了する。土坑及びピットの調査を継続する。古墳主体部の調査を再開する。主体部は木棺直葬を想定する。出土遺物は皆無である。

28日 環濠の調査を終了する。

5月2日 すべての遺構を完掘して航空写真撮影を行う。4軒の竪穴住居跡に断面観察用ベルトを設置し、掘方調査に着手する。

12日 墳丘の斯ち割り調査に着手する。墳丘は旧表土と新时期テフラ層が堆積しており、盛土は後の耕作により削平されたものと思われる。

17日 掘方調査を終了し、すべての調査が終了する。教育委員会の終了確認を受ける。

22日 発掘機材の撤収準備作業を行う。安全柵の撤去を行う。

24日 発掘機材の撤収作業を行い全ての業務を終了する。

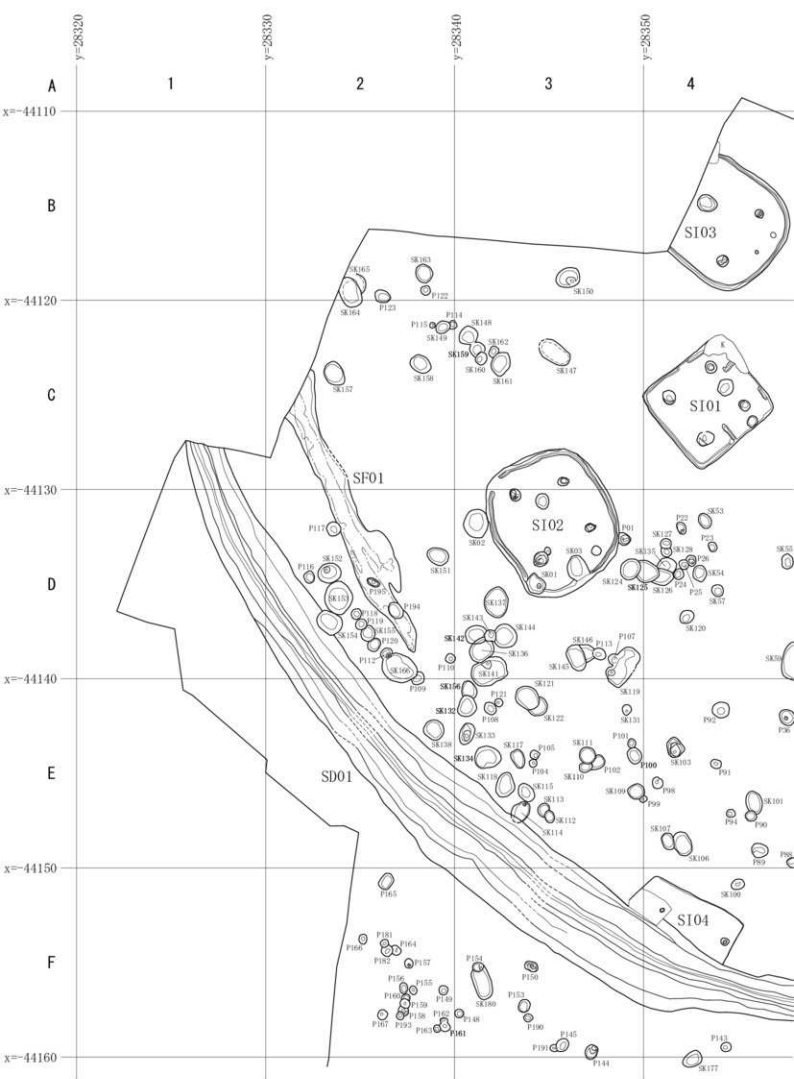


图3 全体測量図(1)

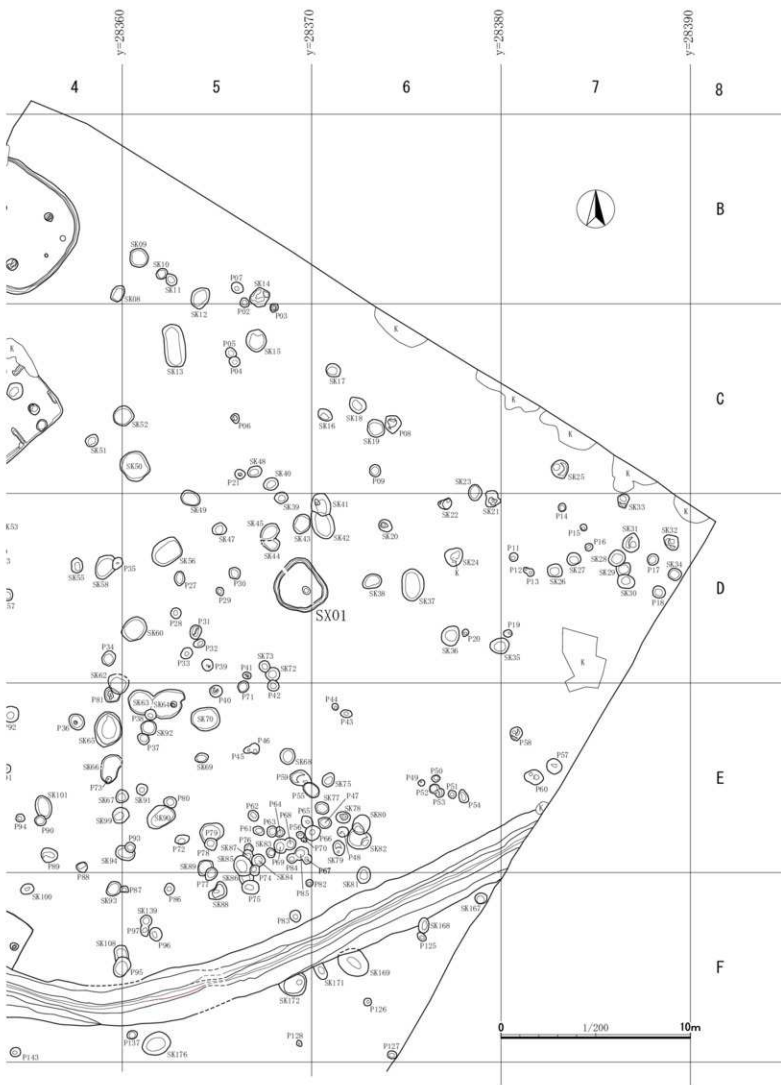


图4 全体测量图 (2)

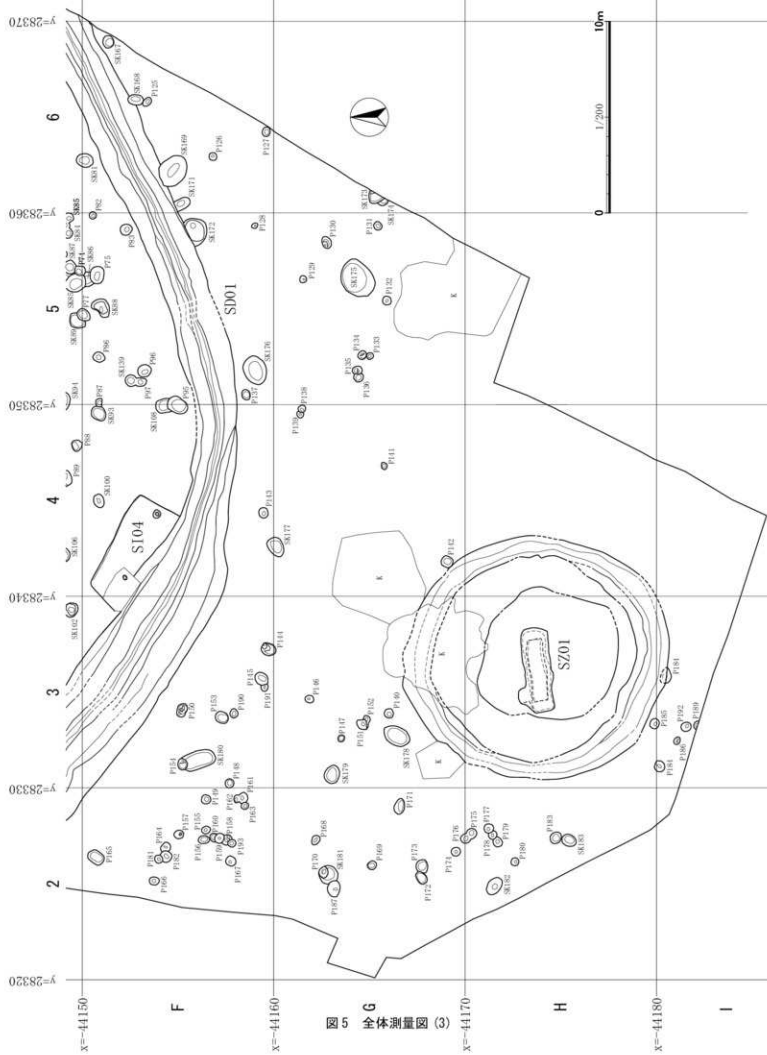


图5 全体测量图(3)

## 第2章 検出した遺構と遺物

本章では調査成果を遺構の帰属時期ごとに分けて記述するが、土坑とピットについてはすべてを時期分類することが困難であるので、一括して一節を設けて後述する。

### 第1節 縄文時代

#### (1) 遺構外出土遺物

6はC4グリッドで検出した半両面加工の木葉型尖頭器。器長10cmを超える大型で、裏面に主要剥離面を大きく残すが左右対称で秀品である。基部に自然面がわずかにみられるが、素材打面の一部と思われる。主要剥離面にバルブのふくらみは観察されない。先端部に調整が施されず、側面に平坦面も残されたままなので刺突具ではないが、調整過程の未成品か刺突具以外の用途の可能性もある。素材はガラス質黒色

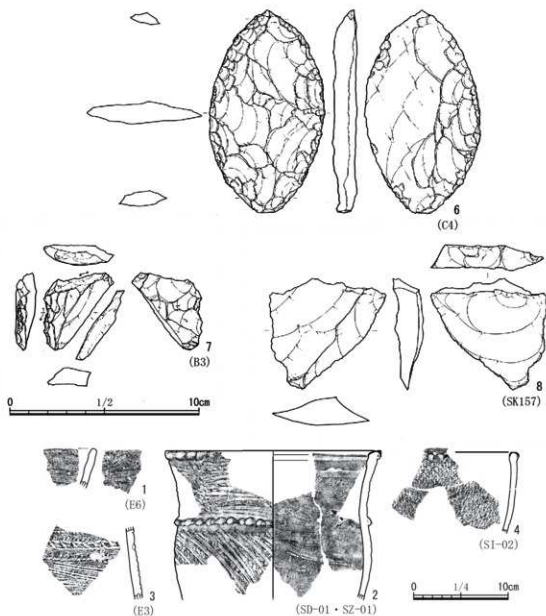


図6 縄文時代遺構外出土遺物

安山岩。やや緻密さに欠けざらついた手触りがするが、そのせいか表面の稜線が風化してわかりづらい箇所が多い。運搬痕の可能性もある。縄文草創期か。

7はB3グリッドで検出。左側縁にやや内湾した削器状の調整加工と潰れが認められるため、挟入石器と分類した。石材はガラス質黒色安山岩である。表面の右側に残された面はポジティブバルブと確認できるため、素材剥片を表裏逆に使われていることがわかる。左側の剥離面はバルブの厚みを取り除くような平坦剥離。裏面（素材背面）には求心的な剥離が残されていることから、両面加工石器の加工中に折れてしまったものを再加工して製品にしているものと思われる。縄文草創期の大型の尖頭器と共存することが知られ、上の尖頭器と同時期の可能性がある。

8は古墳時代中期の第157号土坑で検出されたガラス質黒色安山岩の不定形剥片。頭部調整・打面調整ともに観察されない。打面転移を行い、大型の剥片を効率的に剥離しているものと思われる。

1は早期後半・茅山式土器。内外面調整は削痕か。3は前期後半・浮島Ⅱ式土器で半截竹管による条痕と幅広の変形爪形文が施文されている。2・4は後期中葉・加曾利B式土器（2はB2式）の紐線文粗製土器。4には沈線が見られない。確認調査でも同型式土器が報告されている。

表1 石器属性表

遺構番号	番号	注記	器種	石材	長さ	幅	厚さ	重さ	備考
遺構外	6	C4グリッド	尖頭器	ガラス質黒色安山岩	108	61	17	95.67	未成品か剥突具以外の可能性あり
遺構外	7	B3グリッド	挟入石器	ガラス質黒色安山岩	41	37	11	13.73	加工中に折損、再加工
遺構外	8	SK157No1	剥片	ガラス質黒色安山岩	59	61	16	39.97	
SI02	19	No23	蔵石	蛇紋岩	90	38	19	109.14	



## 第2節 弥生時代

### (1) 竪穴住居跡

#### 第2号竪穴住居跡

**遺構** 位置：C・D3 グリッド。重複関係：第1～3号土坑と第1号ピットに切られる。平面形状：隅丸長方形。主軸方向：N-29°-W。規模：縦7.50m、横6.35m、深さ0.52m。覆土：ローム粒子を中量含む黒褐色土が自然堆積する。炉：土器片埋設炉。火床部の南側に甕16の胴部半周分の大破片を中心に、大型壺14の肩部破片など数個体分の土器片を三重に重ねている。壺底部18は埋没時に乗ったものである。焼土粒を多く含む黒褐色土の覆土が堆積する。床構造：掘方は存在せず、床面には支柱穴内側に部分的にわずかな硬化面が認められたが明瞭ではない。周溝は壁下を一巡し、暗褐色土が堆積する。柱穴：支柱穴P1・P2は東側壁底部が、P3・P4は西側壁底部が外側に潜り込む。立柱もしくは抜き取りに起因するものか。柱穴底部には柱当たり痕が確認されている。貯蔵穴：南東壁近くのP5。暗褐色土が堆積する。

**遺物** 出土状況：炉の埋設土器の他では、甕1と鉢4、壺12・15が床面直上の遺物であるが、ほとんどは覆土下～上層に含まれていた破片である。

**各説**：1・2は横走羽状文の甕。1は頸部がくの字に屈曲して粘土紐積上げ痕を残して段部下端に押捺痕をもつ。3と16は頸部の屈曲が緩やかなもの。4の小型鉢は欠損するもの、6単位の波状口縁と考えられる。口縁端部には鋭利なヘラ刻みを施す。5は黒色を呈するナゲ調整の無文小型壺。6と10は頸部中位に段を有し、6の段部には結節縄文によるものとみられる押捺が巡る。10と14は同形同大の壺と思われるが、同一個体の判断は難しい。13は楕円形の大きな弧文の一部であろうか。6と11は多段の結節縄文、9は楕円形波状文が施される。

19は扁平短冊形のやや軟質な蛇紋岩(斜方輝石カンラン岩起源)の自然礫が使用された破石。素材表面は全体に滑々で一定方向の擦れが観察される。これは河川敷で採集される転石にみられる水食作用による現象である。

正面中央部付近から長軸下端部、及び左側縁部に細かい敲打痕が観察される。敲打痕はφ1～3mm、深さ0.7～0.2mm程で、敲打の集中している箇所は径1cm程の凹みとなっている。左側縁部には長軸に対して横方向の摩擦痕も観察される。敲打痕は石器表面中央部から下端部に偏りがみられ、上部に支点を置いて何か(尖ったもの)を敲いたものなのか。

**所見** 出土土器は佐倉市大崎台遺跡の4期(黒沢1997)、房総6期・宮ノ台式後半期(大村2005)、弥生時代中期末葉に位置づけられる。

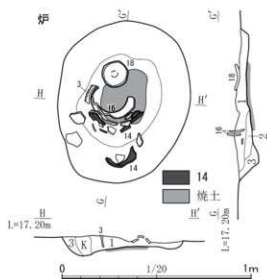
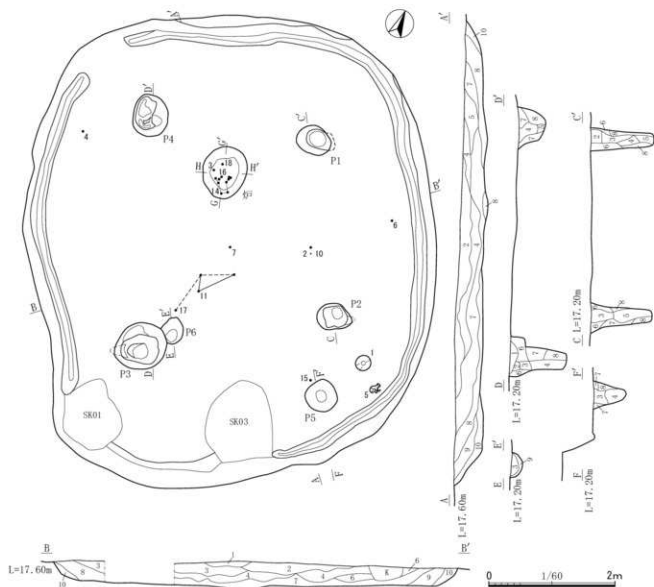
#### S82 AB

- 1層 10YR2/3 黒褐色土・ロームブロック多量・焼土少量・黒褐色土ブロック多量・しまりやあり・粘性ややあり
- 2層 10YR2/2 黒褐色土・ロームブロック中量・焼土少量・黒褐色土ブロック多量・しまりやあり・粘性ややあり
- 3層 10YR2/2 黒褐色土・ロームブロック多量・焼土少量・黒褐色土ブロック中量・しまりやあり・粘性ややあり
- 4層 10YR2/3 黒褐色土・ロームブロック多量・焼土少量・黒褐色土ブロック多量・しまりやあり・粘性ややあり
- 5層 10YR2/3 黒褐色土・ロームブロック少量・炭化物ブロック極微量・黒褐色土ブロック多量・しまりやあり・粘性ややあり
- 6層 10YR2/3 黒褐色土・ロームブロック中量・焼土少量・黒褐色土ブロック多量・しまりやあり・粘性ややあり
- 7層 10YR2/3 黒褐色土・ロームブロック少量・黒褐色土ブロック極多量・しまりやあり・粘性ややあり
- 8層 10YR3/4 暗褐色土・ロームブロック極多量・炭化物ブロック極微量・黒褐色土ブロック極多量・しまりやあり・粘性ややあり
- 9層 10YR3/4 暗褐色土・ロームブロック多量・黒褐色土ブロック極多量・しまりやあり・粘性ややあり
- 10層 10YR3/6 褐色土・ロームブロック多量・黒褐色土ブロック多量・しまりやあり・粘性ややあり

#### S82 P1～P5

- 1層 10YR3/4 暗褐色土・ロームブロック中量・暗褐色土ブロック多量・しまりやあり・粘性ややあり
- 2層 10YR3/4 暗褐色土・ロームブロック多量・炭化物ブロック極微量・暗褐色土ブロック多量・しまりやあり・粘性ややあり
- 3層 10YR3/4 暗褐色土・ロームブロック極多量・焼土極微量・暗褐色土ブロック中量・しまりやあり・粘性ややあり
- 4層 10YR3/4 暗褐色土・ロームブロック多量・暗褐色土ブロック中量・しまりやあり・粘性ややあり
- 5層 10YR2/3 黒褐色土・ロームブロック多量・焼土極微量・暗褐色土ブロック多量・しまりやあり・粘性ややあり

(続きは次ページ)



- 6層 10YR3/4 暗褐色土・ロームブロック多量・焼土塊少量・暗褐色土ブロック多量・しじりあり・粘性ややあり
- 7層 10YR3/4 暗褐色土・ロームブロック中量・黒褐色土ブロック多量・しじりあり・粘性ややあり
- 8層 10YR3/4 暗褐色土・ロームブロック多量・黒褐色土ブロック極多量・しじりあり・粘性ややあり
- 9層 10YR3/4 暗褐色土・ロームブロック極多量・暗褐色土ブロック中量・しじりあり・粘性ややあり
- SK02 5F
- 1層 10YR3/4 暗褐色土・ローム粒子・ブロック1～2mm 多量・焼土粒子・ブロック1～3mm 少量・炭化物ブロック3～5mm 微量・黒褐色土ブロック3～10mm 多量・しじりやや有り・粘性やや有り
- 2層 10YR3/4 暗褐色土・ローム粒子・ブロック1～5mm 中量・焼土粒子・ブロック1～3mm 少量・暗褐色土ブロック3～5mm 中量・しじりやや有り・粘性やや有り
- 3層 10YR3/4 暗褐色土・ローム粒子・ブロック1～5mm 多量・黒褐色土ブロック5～10mm 中量・しじりやや有り・粘性やや有り

図7 第2号竪穴住居跡

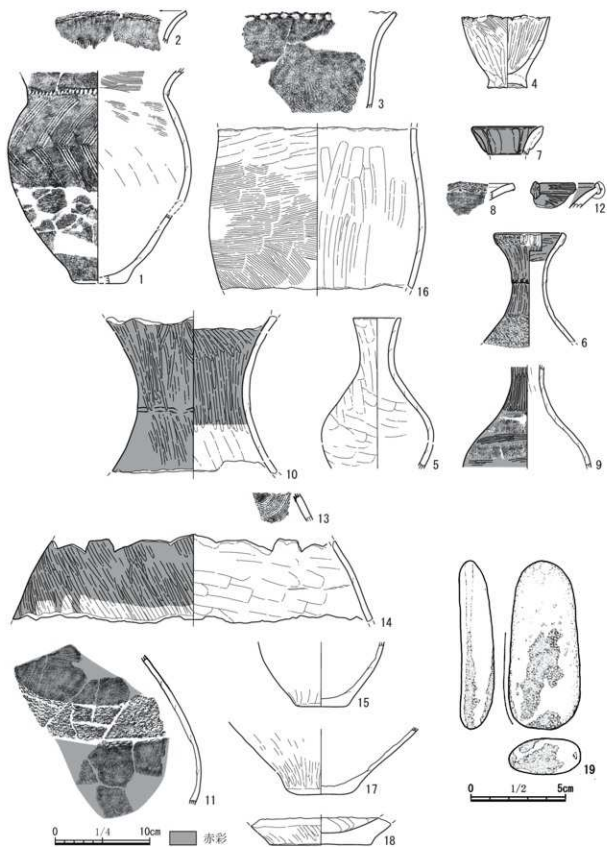


图8 第2号竖穴住居跡出土遺物

### 第3号竪穴住居跡

**遺構** 位置：B4 グリッド。平面形状：隅丸長方形。主軸方向：N-50°-W。規模：縦方向 5.30 m 以上、横方向 5.95 m、深さ 0.47 m。覆土：下層にはロームブロックを多く含む暗褐色土が、その上層にはローム粒を多く含む黒褐色土がレンズ状堆積する。炉：覆土は下層では焼土ブロックを多く含む暗褐色土が、上層には焼土粒と炭化ブロックを多く含む暗褐色土がレンズ状堆積する。掘方は持たず、火床直下では地山が厚さ最大 13cm の深さまで被熱し、暗褐色に変色してカリカリに固く締まる。床構造：主柱穴より内側の床面には部分的にわずかな硬化面の広がりが確認された。掘方は存在しない。周溝は壁面直下を一巡し、暗褐色土が堆積している。柱穴：確認された 2 本はいわゆる「五平（状）柱」を示し、掘方が東西方向に長い。

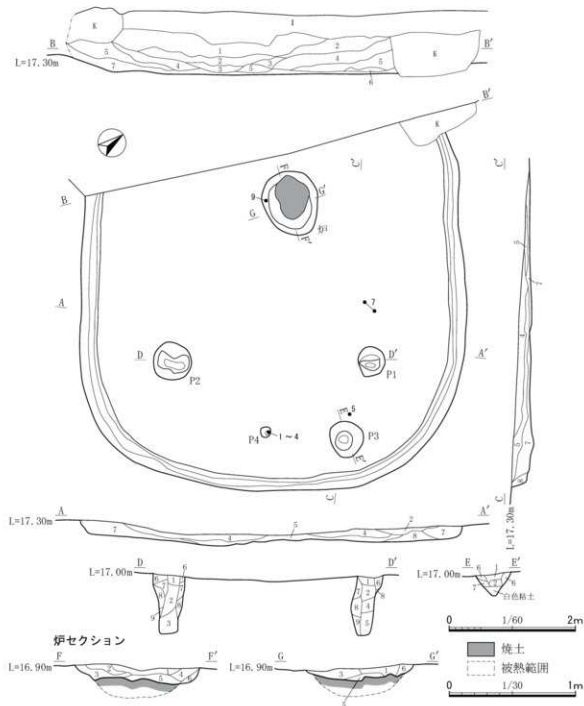


図9 第3号竪穴住居跡

底部には東西方向に長く柱当たり痕が確認された。P4 は出入り口施設に伴うピットであろう。貯蔵穴：南東壁際の P3。ルームブロックを多く含む黒褐色土が人為堆積し、底部に白色粘土塊が検出された。

**遺物** 出土状況：P4 付近の床面上で土器の破片が固まって検出され、甕 1～4 が含まれる。調査した覆土が浅く、自ずと出土遺物は覆土下層に包含されていたものとなるが、破片ばかりである。

**各説**：1・2 は横走羽状文の甕。1 は細身・小型で楕描きが 3 段確認できる。2 の楕描きは口縁端部にまで及び、頸部の屈曲は極めて弛緩して深鉢形を呈するものと思われる。口縁端部の押捺は爪痕が残る指頭によるもので、内面からのみ施される。8 は甕の底部で、外面下端に指？押捺痕が並ぶ。

**所見** 本住居跡出土土器群も概ね第 2 号住居跡と同時期（大崎台 4 期・房総 6 期）に位置づけてよいと思われる。



図 10 第 3 号竪穴住居跡出土遺物

S303 AB

- 1層 10VR2/3 黒褐色土・ロームブロック中量・焼土中量・黒褐色土ブロック少量・しまりややあり・粘性ややあり
- 2層 10VR3/4 暗褐色土・ロームブロック多量・焼土中量・黒褐色土ブロック微量・しまりややあり・粘性ややあり
- 3層 10VR3/4 暗褐色土・ロームブロック極多量・焼土極多量・黒褐色土ブロック少量・しまりややあり・粘性ややあり
- 4層 10VR2/2 黒褐色土・ロームブロック多量・黒褐色土ブロック多量・しまりややあり・粘性ややあり
- 5層 10VR3/4 暗褐色土・ロームブロック多量・焼土中量・炭化物ブロック少量・しまりややあり・粘性なし
- 6層 10VR1/6 褐色土・ロームブロック極多量・黒褐色土ブロック中量・しまりあり・粘性ややあり

S303 C

- 1層 10VR2/2 黒褐色土・ロームブロック多量・焼土少量・暗褐色土ブロック少量・しまりややあり・粘性ややあり
- 2層 10VR2/3 黒褐色土・ロームブロック中量・焼土微量・暗褐色土ブロック少量・しまりややあり・粘性ややあり
- 3層 10VR2/3 黒褐色土・ロームブロック中量・焼土少量・暗褐色土ブロック中量・しまりややあり・粘性ややあり
- 4層 10VR2/3 黒褐色土・ロームブロック少量・暗褐色土ブロック少量・しまりややあり・粘性ややあり
- 5層 10VR3/4 暗褐色土・ロームブロック多量・黒褐色土ブロック少量・しまりややあり・粘性ややあり
- 6層 10VR3/4 暗褐色土・ロームブロック中量・暗褐色土ブロック極多量・しまりややあり・粘性ややあり
- 7層 10VR3/3 暗褐色土・ロームブロック多量・焼土微量・炭化物ブロック極微量・暗褐色土ブロック中量・しまりややあり・粘性ややあり
- 8層 10VR3/3 暗褐色土・ロームブロック極多量・黒褐色土ブロック微量・しまりややあり・粘性ややあり

S303 P1 ~ P3

- 1層 10VR4/6 褐色土・ロームブロック極多量・黒褐色土ブロック多量・しまりあり・粘性ややあり
- 2層 10VR1/6 褐色土・ロームブロック極多量・暗褐色土ブロック中量・しまりややあり・粘性ややあり
- 3層 10VR1/6 褐色土・ロームブロック多量・暗褐色土ブロック少量・しまりあり・粘性ややあり
- 4層 10VR1/6 褐色土・ロームブロック多量・暗褐色土ブロック少量・しまりあり・粘性ややあり
- 5層 10VR1/6 褐色土・ロームブロック多量・暗褐色土ブロック少量・しまりあり・粘性ややあり
- 6層 10VR3/4 暗褐色土・ロームブロック多量・暗褐色土ブロック少量・しまりあり・粘性ややあり
- 7層 10VR1/6 褐色土・ロームブロック極多量・暗褐色土ブロック中量・しまりあり・粘性ややあり
- 8層 10VR4/6 褐色土・ロームブロック多量・暗褐色土ブロック少量・しまり強・粘性ややあり
- 9層 10VR1/6 褐色土・ロームブロック多量・暗褐色土ブロック少量・しまり強・粘性ややあり

#### 第4号竪穴住居跡

**遺構** 位置：F3・4グリッド。重複関係：北西壁部は確認調査トレンチ14によって破壊されている。南西側の大半を環濠に切られる。平面形状：方形。主軸方向：N-62°-W。規模：縦5.85m、横2.50m以上、深さ0.27m。覆土：床面上には焼土と炭化ブロックを少量含む暗褐色土が、その上層にはロームブロックを多量に含む暗褐色土が人為堆積する。床構造：床面はほぼ全面に硬化面が広がる。掘方は持たない。北東壁と南東壁際がわずかに低くなるが、周溝は確認されていない。柱穴：P1は柱痕跡が確認された。底部には柱当たり痕が確認されている。P2は柱痕跡が確認されず、底部には硬化面が確認されない。断面形がやや楕円状であり貯蔵穴の可能性もある。

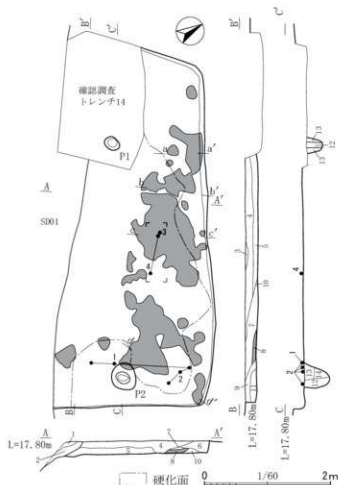


図11 第4号竪穴住居跡

#### SD04

- 1層 10VR4/3に多い黄褐色土・ロームブロック少量・焼土少量・しまりあり・粘性あり・SD01覆土
- 2層 10VR5/4に多い黄褐色土・ロームブロック多量・暗褐色土ブロック多量・しまりあり・粘性あり・SD01覆土
- 3層 10VR4/3に多い黄褐色土・ロームブロック少量・暗褐色土ブロック多量・しまりあり・粘性あり
- 4層 10VR3/4暗褐色土・焼土多量・しまりあり・粘性あり
- 5層 10VR3/4暗褐色土・焼土少量・暗褐色土ブロック多量・しまりあり・粘性あり
- 6層 10VR4/3に多い黄褐色土・ロームブロック中量・焼土少量・暗褐色土ブロック多量・しまりあり・粘性あり
- 7層 7.5VR1/4褐色土・ロームブロック少量・焼土多量・しまりあり・粘性あり
- 8層 2.5VR1/9明赤褐色土・焼土多量・暗褐色土ブロック中量・しまり強・粘性強・焼土残層
- 9層 7.5VR1/3褐色土・しまり強・粘性あり
- 10層 10VR4/3に多い黄褐色土・焼土少量・暗褐色土ブロック少量・しまりあり・粘性ややあり
- 11層 10VR2/2暗褐色土・炭化物ブロック少量・しまりあり・粘性あり
- 12層 10VR3/3暗褐色土・ロームブロック中量・暗褐色土ブロック多量・しまりあり・粘性強
- 13層 10VR3/3暗褐色土・しまりあり・粘性ややあり
- 14層 10VR4/4褐色土・ロームブロック多量・暗褐色土ブロック多量・しまりあり・粘性あり

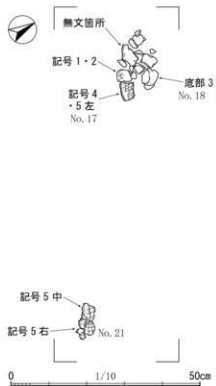


図12 絵画土器・鉢3・4出土状況図

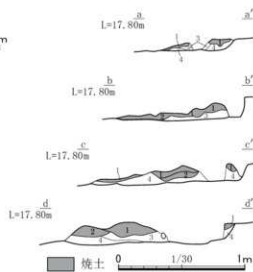


図13 第4号竪穴住居跡焼土セクション

**遺物 出土状況：**壺1・2は床面直上で検出された。底部3と鉢4は直接接合しないが、出土状況及び胎土・成形・焼成から同一個体と判断される。4は2か所に分かれ、北側の一群は3とともに焼土の上に乗る状態で、南側の一群は床面直上で検出された。

**各説：**1は折返し口縁状を呈するやや丁寧なつくりの口縁部であるが、器種は定かではない。4は器壁や器形が一定せず口縁部のヨコナデ調整がない粗製の小型鉢であるが、短く屈曲する内斜口縁など類似する器形は鴨川市東条地区遺跡群の根方上ノ芝条里跡1地点SI04出土土器を参考となる（野中ほか2000）。3の底部は接合しないが、出土状態も合わせ同一個体と判断される。外面上半部のほぼ全周と内面の一部に先端が鋭利ではない細い棒状工具による線刻画が記されている（付載参照）。

**所見** 本住居跡は火災住居跡である。焼土は北東壁際から南東壁際に及び、断面観察の結果、焼土と床面の間には暗褐色土の間層が存在する。焼土は火災消火のための投げ込まれた土が焼土化したものか。遺物の出土状況から焼却された住居跡であろうか。

出土遺物が乏しく時期は明確にできないが、宮ノ台式期であることは明らかである。弥生中期の住居跡及び環濠跡出土土器との型式学的距離はなく、環濠に切られることから、その直前段階のものと思われる。

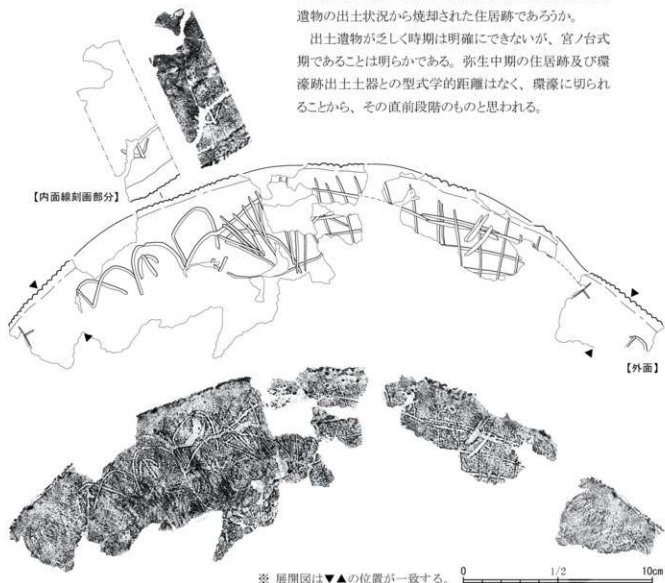


図14 第4号竪穴住居跡出土鉢4の線刻画

SI04 焼土

- 1層 10YR2.4 暗褐色土・焼土粒子・ブロック多量・黒褐色土ブロック中量・ややL2あり・粘性ややあり
- 2層 5YR5/3 明赤褐色土・黒褐色土ブロック少量・暗褐色土ブロック中量・ややL2あり・粘性なし
- 3層 10YR2.4 暗褐色土・ロームブロック多量・焼土ブロック微量黒褐色土ブロック多量・ややL2あり・粘性ややあり
- 4層 10YR2.4 暗褐色土・ロームブロック多量・焼土ブロック中量・黒褐色土ブロック少量・ややL2あり・粘性ややあり

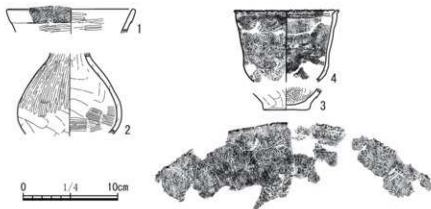


図15 第4号竪穴住居跡出土遺物

(2) 環濠跡

**遺構** 位置：C～F・I～7グリッド。セクションベルトを境にA～G区に分けた。調査区を東西に横断して弧を描くように検出された。重複：第4号竪穴住居跡、第114・169・170・171号土坑、P190を切る。第154・168号土坑に切られる。**規模・形状**：調査区中央4ライン付近から西は溝底が一段低くなり、上端幅が広がる。東半部は上端幅最大2.5m、深さ1.3m、西半部は上端幅最大4.5m、深さ1.8m。E2グリッドから西側は再び幅が狭くなる。横断面形は下部に傾斜変換点をもつV字状であるが、幅の広い西半部東側はなだらかなV字状を呈する。底部はU字状である。底部に掘削痕とみられる箇所があった（F6グリッド）が、明確ではない。覆土：下部にロームブロックを多く含む暗褐色土が堆積し、最上層では黒褐色土がレンズ状堆積する。セクションF付近では暗褐色土上面（第8・9層）で硬化面を確認したが広がりは確認されなかった。

**遺物** 出土状況：下層（第14層相当）に弥生中期土器1・3が検出された。古墳中期高杯4は上層の第1層と第2層の境界線付近で出土した。

**各説**：1は外面上半部のヘラナデが左下がりに施される独特な甕である。口縁部内面の指押捺（爪痕あり）の方向からすると製作者は右利きと推察される。底面中央には焼成後に外からの回転穿孔がなされるが貫通していない。4は広口壺の系列と思われるが、頸部と肩部に無文帯をはさんで多段の結節縄文が施され、赤彩は無文帯から肩部縄文帯にまで及ぶ。2は外面に左上がりの条痕（右上がりの線状痕はガジリ）、内面はタテ方向のケズリが加えられる。弥生前期の荒濠式であろうか。

**所見** やはり、住居跡と同様、宮ノ台式後半期に位置づけられるであろう。5は覆土上層で検出された古墳時代中期前半の高杯である。この時期までくぼみとして残っていたと考えられる。また、セクションA（トレンチ）で灰軸陶器瓶類の胴下半部の破片が検出されている。器壁は薄手で軸層は薄いが露胎部分はなく9世紀～10世紀前半のものであろうか、詳細時期は判断できない。

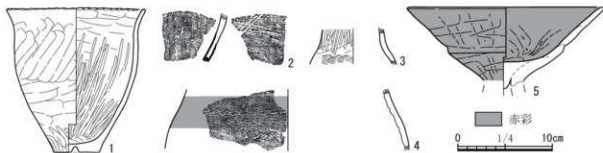


図16 環濠跡出土遺物



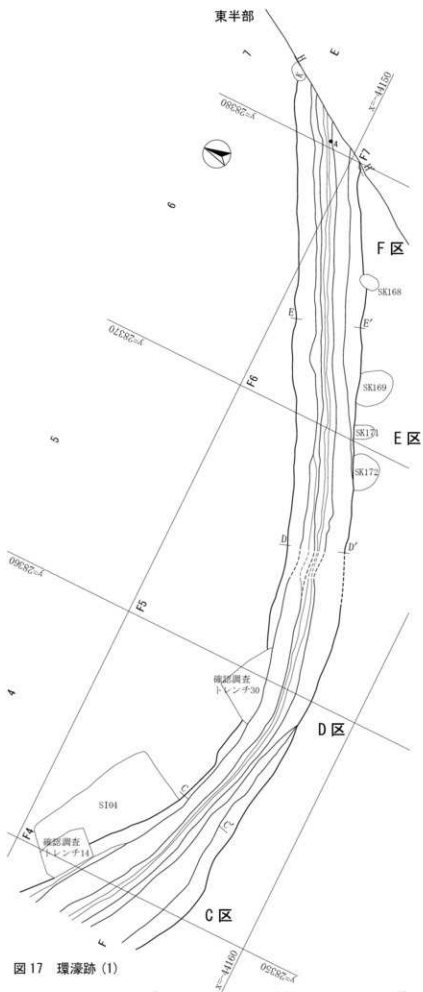
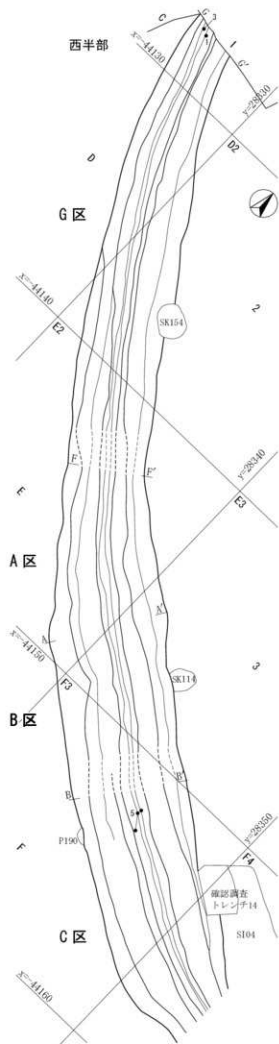


図17 環濠跡(1)

### 第3節 古墳時代

#### (1) 竪穴住居跡

##### 第1号竪穴住居跡

**遺構** 位置：C4グリッド。平面形状：ほぼ正方形。主軸方向：N-47°-E。規模：縦5.40m、横5.07m、深さ0.42m。覆土：ロームブロックを多く含む暗褐色土。人為堆積。床構造：掘方は壁下と4本の主柱穴の間部分と炉下部がやや深い。周溝は南東壁下・南西壁下・北西壁下にのみ存在する。南東壁下と北東壁下に間仕切り溝が確認された。炉：覆土は焼土ブロックを多く含む暗褐色土が堆積する。焼土直下では最大約15cmの厚さで被熱痕跡が確認され、褐色の地山土が暗褐色に変色しカリカリに硬化している。柱穴：柱痕跡（P2では炭化した柱根）が確認され、掘方覆土第5層は貼り床である。底部には柱当たり痕が明瞭に確認された。貯蔵穴：南東のP1横に確認され、覆土は焼土混じりの暗褐色土が人為堆積する。

**遺物** 出土状況：ほとんどは床面上で検出。壺14は焼土の上に乗っている。全体的に完形率が高い。

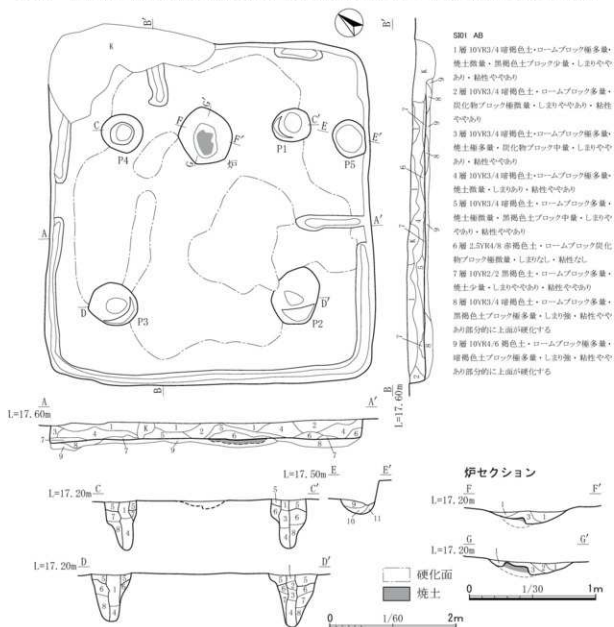


図19 第1号竪穴住居跡

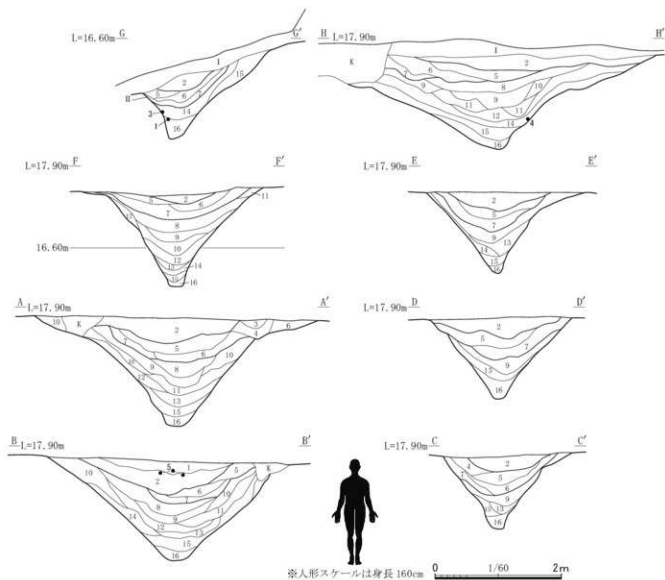


図 18 環濠跡 (2)

5001

- 1 10YR3/2 黒褐色土・ロームブロック多量・黒褐色土ブロック中量・やや締まりがある・やや粘性あり
- 2 10YR2/2 黒褐色土・ロームブロック多量・黒褐色土ブロック中量・やや締まりあり・やや粘性あり
- 3 10YR4/4 褐色土・ロームブロック多量・暗褐色土ブロック少量・やや締まりあり・やや粘性あり
- 4 10YR3/2 黒褐色土・ロームブロック多量・黒褐色土ブロック多量・やや締まりあり・やや粘性あり
- 5 10YR3/3 暗褐色土・ロームブロック多量・黒褐色土ブロック少量・やや締まりあり・やや粘性あり
- 6 10YR3/3 暗褐色土・ロームブロック多量・黒褐色土ブロック中量・やや締まりあり・やや粘性あり
- 7 10YR3/3 暗褐色土・ロームブロック少量・黒褐色土ブロック中量・やや締まりあり・やや粘性あり
- 8 10YR3/3 暗褐色土・ロームブロック中量・黒褐色土ブロック中量・やや締まりあり・やや粘性あり
- 9 10YR3/4 暗褐色土・ロームブロック多量・黒褐色土ブロック多量・やや締まりあり・やや粘性あり
- 10 10YR3/4 暗褐色土・ロームブロック多量・黒褐色土ブロック多量・やや締まりあり・やや粘性あり
- 11 10YR3/4 暗褐色土・ロームブロック多量・黒褐色土ブロック多量・やや締まりあり・やや粘性あり
- 12 10YR3/4 暗褐色土・ロームブロック多量・黒褐色土ブロック中量・やや締まりあり・やや粘性あり
- 13 10YR3/2 黒褐色土・ロームブロック多量・黒褐色土ブロック多量・やや締まりあり・やや粘性あり
- 14 10YR3/4 暗褐色土・ロームブロック多量・黒褐色土ブロック中量・やや締まりあり・やや粘性あり
- 15 10YR3/4 暗褐色土・ロームブロック多量・黒褐色土ブロック少量・やや締まりあり・やや粘性あり
- 16 10YR3/3 暗褐色土・ロームブロック多量・黒褐色土ブロック中量・暗褐色土と黒褐色土が互に層積・締まりあり・やや粘性あり

各説：2はやや下膨れ気味の形態で、口縁端部に押捺はなく端部内面にヨコナデによる匙面が作られる。3は厚手のつくりで煮沸痕跡もなく、広口壺の系列で考えるべきであろう。6はハケメを記さず長胴化しているが、つくりはシャープである。13は大型であるが薄手のつくりで、頭が太く広口壺の類か。15も極めて薄手のつくりの軽量の小型壺。

所見 床面には焼土と炭化材が確認されている。焼土は炭化物層の上に乗っており、消火する目的で投入された土が焼けたものか、あるいは住居の構築材であろうか。焼土直下の炭化材は住居跡中央からやや放射状に、あるいはその放射状の炭化材に直行する形で検出された。遺物の出土状態から火災に見舞われた住居跡を想定する。また、硬化面と貯蔵穴の位置から南東壁側出入口があったかもしれない。

本住居跡から出土した甕と壺は、弥生時代後期からの系列を示す頸部の屈曲が緩やかなもの（1～3）と古墳時代前期の属性を示す屈折するもの（4～7・12～15）がある。その他のものも台付甕脚台部（8）と高杯（9・10）、器台（11）、椀（16）は後者に伴うものであろう。1は砂質の胎土や整形からも弥生中期・宮ノ台式である。4・6と混在して取り上げられ、大破片であるが埋没時の混入と思われる。2の形態は弥生終末期の中台式まで下るだろうか。

後者の型式は古墳前期後葉・草刈Ⅱ期前半（加藤 2000・2005）・草刈Ⅰ式期（大村 2009）に位置づけられるが、前者の型式の存在から、本住居跡の帰属時期は其中でも古い段階が考えられるだろう。

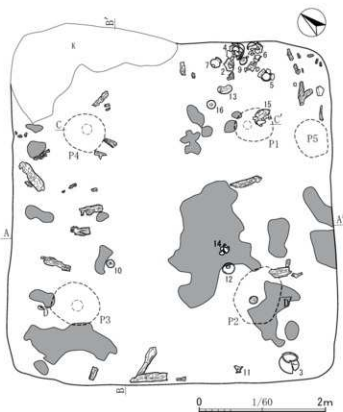


図 20 第1号竪穴住居跡 遺物出土状況図

#### S301 伊

- 1 層 10YR3/4 暗褐色土・ロームブロック中量・焼土微量・暗褐色土ブロック多量・しまりあり・粘性ややあり
- 1 層 10YR4/6 暗色土・ロームブロック極多量・焼土微量・暗褐色土ブロック中量・しまりあり・粘性なし
- 3 層 10YR3/4 暗褐色土・ロームブロック多量・焼土少量・暗褐色土ブロック中量・しまりあり・粘性なし

#### S301 P1～P5

- 1 層 10YR3/4 暗褐色土・ロームブロック極多量・焼土極微量・暗褐色土ブロック少量・しまりややあり・粘性ややあり
- 2 層 10YR3/4 暗褐色土・ロームブロック極多量・焼土極微量・暗褐色土ブロック中量・しまりなし・粘性ややあり
- 3 層 10YR2/3 黒褐色土・ロームブロック極多量・焼土少量・炭化物ブロック微量・暗褐色土ブロック中量・しまりなし・粘性ややあり
- 4 層 10YR2/3 黒褐色土・ロームブロック極多量・炭化物ブロック微量・暗褐色土ブロック少量・しまりなし・粘性ややあり
- 5 層 10YR3/4 暗褐色土・ロームブロック極多量・暗褐色土ブロック少量・しまりあり・粘性ややあり
- 6 層 10YR3/4 暗褐色土・ロームブロック多量・黒褐色土ブロック多量・しまりあり・粘性ややあり
- 7 層 10YR3/4 暗褐色土・ロームブロック極多量・炭化物ブロック極微量・暗褐色土ブロック中量・しまりあり・粘性ややあり
- 8 層 10YR2/3 黒褐色土・ロームブロック多量・黒褐色土ブロック少量・しまりあり・粘性ややあり
- 9 層 10YR3/4 暗褐色土・ロームブロック中量・焼土多量・暗褐色土ブロック中量・しまりややあり・粘性ややあり
- 10 層 10YR3/4 暗褐色土・ロームブロック多量・焼土多量・炭化物ブロック微量・しまりややあり・粘性ややあり
- 11 層 10YR2/2 黒褐色土・ロームブロック中量・焼土多量・炭化物ブロック多量・しまりややあり・粘性ややあり

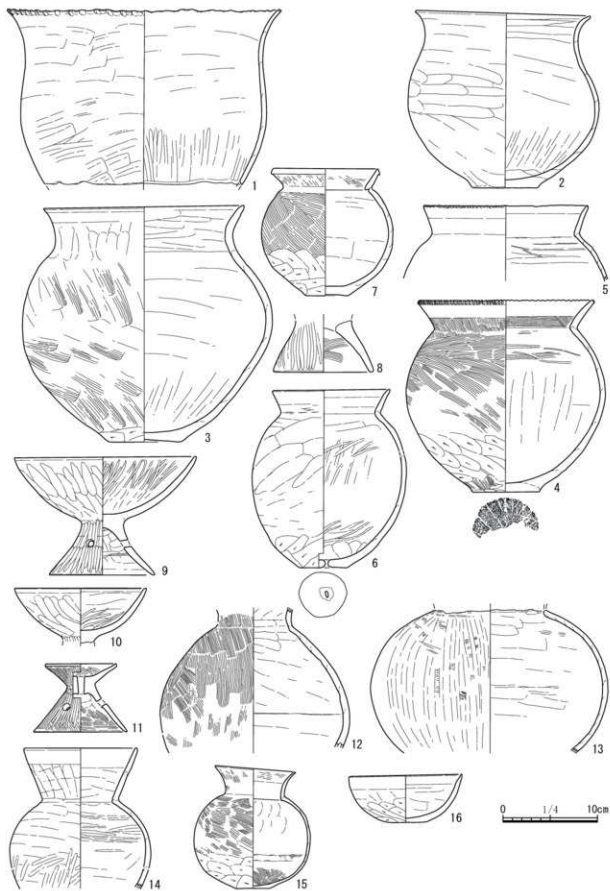


图 21 第 1 号竖穴住居跡出土遺物

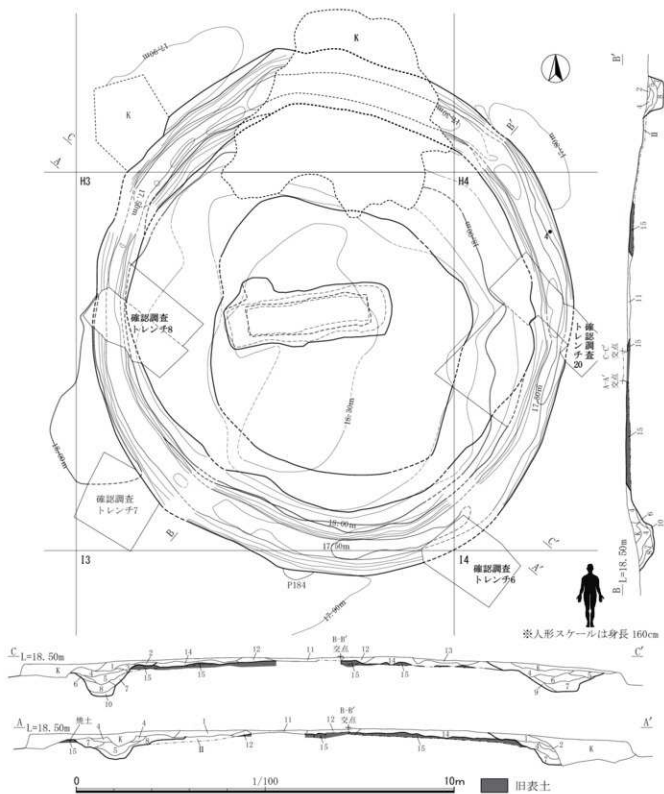


図22 古墳（和唐地古墳）

## (2) 古墳（和唐地古墳）

**遺構 位置：**調査区の南西端、G～I・3～4グリッド。丘陵状台地の中央部、最高所（標高18.5m）に位置する。調査前の現況は、山林内にやや地彫れ状に確認された。南東側の一部と北側は大きく攪乱されていた。

**墳丘：**規模（周溝内側下端間）は長軸（南北）11.8m、短軸（東西）11.3mを測る円墳。周溝が一巡する。残存墳頂部の標高18.3m。腐葉土と土壌化した表土を精査すると旧表土が現れ、中央には主体部が確認された。

旧表土は北側が流失しているものの周溝内側の墳丘を全面に覆い、最大で厚さ約15cmを測る。約3～5cmと薄い部分がまだらに確認され、墳丘構築時に整地作業が行われたためか。周溝の外側でも旧表土は明瞭に確認され、また、北西部の周溝外側上端部において旧表土上に明瞭な焼土が確認されている（セクションA）。遺物は伴っていないが、古墳構築時に草木を焼き払った痕跡、あるいは祭祀跡と思われる。

墳丘の断面観察から、旧表土の上には最大25cmほどの厚さでロームブロックを多く含む暗褐色土の盛土の存在が確認された。盛土の周囲には周溝の内側に幅45cmほどのテラスが回るものと復元される。残存墳丘の高さは周溝底から98cmほどである。

**周溝：**北部が攪乱により削平を受けるが墳丘を全周すると思われる。規模は上端幅最大1.97m、下端幅同1.40m、深さ同0.8mを測る。断面形は底部が平坦な逆台形。覆土は自然堆積であり底部にはロームブロックを多く含む暗褐色土が堆積し、その上部には墳丘側からの流入土が堆積する。最上部はレンズ状の自然堆積である。

**埋葬施設：**墳丘ほぼ中央に東西方向を軸（E-8°-N）とする埋葬施設が存在する。墓壇は平面長方形。規模は長軸最大4.43m、短軸同1.45m。北西に張り出し部が存在するが、土層観察によると再掘削も想定され、状況は一律ではない。

中央部は墓壇よりも一段低くなり、木棺掘方と考えられる。規模は長軸最大3.24m、短軸同1.20m、深さ0.65m。褐色土、暗褐色土、ロームブロックを多く含む黒褐色土が互層をなすように堆積する。棺材が置換したような土層は看取されなかった。木棺裏込め（墓壇埋土）は固く締まった褐色土とロームブロックを多く含む暗褐色土・黒色土が互層をなして突き固められた痕跡が伺える。東部と西部の上層には白色粘土が存在する。

**遺物 出土状況：**周溝の覆土から検出された遺物は、北西側の確認面付近で検出された土器片（高

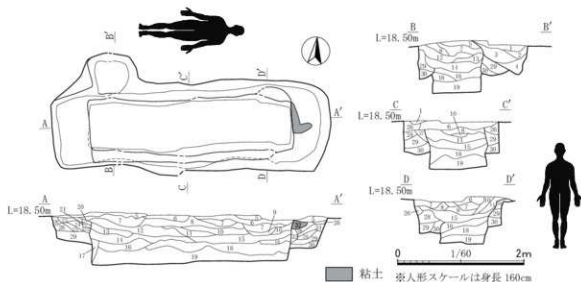


図23 古墳（和唐地古墳）埋葬施設



図 24 古墳出土遺物

杯 4 ほか) を始め、わずかであった。埋葬施設では棺内外ともに出土遺物は皆無であった。

各説：1 は甕、3 は形状から有段口縁壺の口縁部の可能性がある。2 は赤彩壺の底部。4 は小片のため判然としないが、杯上半部が浅い高杯。

所見 セクション A・C 南東側の盛土第 14 層の傾斜で墳丘を復元すると、盛土はさらに 50cm 弱高く、墳丘の高さは 1.5 m 弱ほどになるだろうか。一段深い木棺掘方と箱形石棺墓を思わせる堅緻な裏込め(埋土)は、墓壇内に直接、棺を組み立てる方式が指摘できる。また、墓壇北西の張り出し部の覆土は木棺覆土に切られるようでもあり(上半部は木棺腐朽による覆土陥没時の内側への倒れ込みか)、埋葬時の出入り口(ステップ)などの機能を想定したい。

遺物が乏しく明確にできないが、出土土器群は概ね中期前半に帰属するものとみてよいだろう。環濠跡覆土上層で検出された高杯杯部も同じ時期で、古墳由来のもの可能性がある。また、C-3 グリッドで屈折脚高杯の脚部が出土しているが、短脚で明瞭な屈折を示すことから古墳出土の土器群より少し新しい(中期中葉)ようである。

#### S201 墳丘

- 1 層 10YR3/4 暗褐色土・ロームブロック多量・しまりややあり、粘性ややあり
- 2 層 10YR3/4 暗褐色土・ロームブロック多量・焼土極微量・黒褐色土ブロック多量・しまりあり、粘性ややあり
- 3 層 10YR2/3 黒褐色土・ロームブロック多量・焼土極微量・黒褐色土ブロック多量・しまりあり、粘性ややあり
- 4 層 10YR2/3 黒褐色土・ロームブロック中量・焼土微量・暗褐色土ブロック多量・しまりあり、粘性ややあり
- 5 層 10YR2/3 黒褐色土・ロームブロック多量・暗褐色土ブロック多量・しまりあり、粘性ややあり
- 6 層 10YR3/4 暗褐色土・ロームブロック中量・黒褐色土ブロック多量・しまりややあり、粘性ややあり
- 7 層 10YR3/4 暗褐色土・ロームブロック多量・黒褐色土ブロック多量・しまりややあり、粘性ややあり
- 8 層 10YR2/3 黒褐色土・ロームブロック多量・暗褐色土ブロック多量・しまりあり、粘性ややあり
- 9 層 10YR3/4 暗褐色土・ロームブロック多量・黒褐色土ブロック多量・しまりややあり、粘性ややあり
- 10 層 10YR4/4 褐色土・ロームブロック多量・黒褐色土ブロック中量・しまりあり、粘性ややあり
- 11 層 10YR4/6 褐色土・ロームブロック多量・焼土極微量・黒褐色土ブロック中量・しまり強、粘性ややあり
- 12 層 10YR3/4 暗褐色土・ロームブロック多量・焼土極微量・黒褐色土ブロック多量・しまり強、粘性ややあり
- 13 層 10YR3/4 暗褐色土・ロームブロック中量・暗褐色土ブロック多量・しまり強、粘性ややあり
- 14 層 10YR2/3 黒褐色土・ロームブロック多量・焼土微量・黒褐色土ブロック多量・しまり強、粘性ややあり
- 15 層 10YR2/3 黒褐色土・ロームブロック多量・焼土少量・炭化物ブロック微量・暗褐色土ブロック多量・しまりあり、粘性ややあり

#### SM01 A-D 主体部

- 1 層 10YR3/4 暗褐色土・ロームブロック中量・黒褐色土ブロック中量・暗褐色土ブロック多量・しまり強、粘性ややあり、やや砂質に富む
- 2 層 10YR3/4 暗褐色土・ロームブロック多量・黒褐色土ブロック中量・暗褐色土ブロック中量・しまり強、粘性ややあり
- 3 層 10YR3/4 暗褐色土・ロームブロック多量・黒褐色土ブロック中量・暗褐色土ブロック少量・しまり強、粘性ややあり
- 4 層 10YR3/4 暗褐色土・ロームブロック多量・黒褐色土ブロック多量・暗褐色土ブロック多量・しまり強、粘性ややあり
- 5 層 10YR4/4 褐色土・ロームブロック多量・黒褐色土ブロック微量・暗褐色土ブロック多量・しまり強、粘性ややあり
- 6 層 10YR4/4 褐色土・ロームブロック多量・黒褐色土ブロック中量・暗褐色土ブロック少量・しまりあり、粘性ややあり
- 7 層 10YR3/4 暗褐色土・ロームブロック多量・黒褐色土ブロック極微量・暗褐色土ブロック多量・しまり強、粘性ややあり
- 8 層 10YR3/4 暗褐色土・ロームブロック多量・黒褐色土ブロック極微量・暗褐色土ブロック多量・しまりあり、粘性ややあり、褐色色年度ブロックごく微量を含む
- 9 層 10YR3/4 暗褐色土・ロームブロック多量・暗褐色土ブロック中量・しまり強、粘性ややあり
- 10 層 10YR4/4 褐色土・ロームブロック多量・黒褐色土ブロック中量・暗褐色土ブロック多量・しまりあり、粘性ややあり
- 11 層 10YR4/4 褐色土・ロームブロック多量・黒褐色土ブロック中量・暗褐色土ブロック多量・しまり強、粘性ややあり
- 12 層 10YR3/4 暗褐色土・ロームブロック多量・黒褐色土ブロック少量・暗褐色土ブロック多量・しまり強、粘性ややあり、炭化物ブロック微量を含む
- 13 層 10YR3/4 暗褐色土・ロームブロック多量・黒褐色土ブロック微量・暗褐色土ブロック中量・しまりあり、粘性ややあり
- 14 層 10YR3/4 暗褐色土・ロームブロック中量・黒褐色土ブロック中量・暗褐色土ブロック中量・しまりあり、粘性ややあり
- 15 層 10YR3/4 暗褐色土・ロームブロック多量・炭化物ブロック微量・黒褐色土ブロック中量・しまりあり、粘性ややあり
- 16 層 10YR4/4 褐色土・ロームブロック中量・暗褐色土ブロック中量・しまりあり、粘性ややあり
- 17 層 10YR3/4 暗褐色土・ロームブロック多量・暗褐色土ブロック・しまりあり、粘性ややあり
- 18 層 10YR4/6 褐色土・ロームブロック多量・暗褐色土ブロック・しまりあり、粘性ややあり
- 19 層 10YR4/6 褐色土・ロームブロック多量・黒褐色土ブロック・暗褐色土ブロック・しまりあり、粘性ややあり
- 20 層 10YR4/6 褐色土・ロームブロック多量・黒褐色土ブロック・しまり強、粘性ややあり



- 21 層 10YR2/3 黒褐色土・ロームブロック中量・暗褐色土ブロック・しまり強・粘性ややあり  
 22 層 10YR3/4 暗褐色土・ロームブロック中量・黒褐色土ブロック・しまり強・粘性ややあり  
 23 層 10YR3/4 暗褐色土・ロームブロック多量・黒褐色土ブロック・しまり強・粘性ややあり  
 24 層 10YR3/4 暗褐色土・ロームブロック多量・黒褐色土ブロック・暗褐色土ブロック・しまり強・粘性ややあり  
 25 層 10YR3/4 暗褐色土・ロームブロック中量・暗褐色土ブロック・しまり強・粘性ややあり  
 26 層 10YR2/3 黒褐色土・ロームブロック多量・黒褐色土ブロック・しまり強・粘性ややあり  
 27 層 10YR3/4 暗褐色土・ロームブロック多量・黒褐色土ブロック・しまりあり・粘性ややあり  
 28 層 10YR3/4 暗褐色土・ロームブロック極多量・暗褐色土ブロック・しまりあり・粘性ややあり  
 29 層 10YR3/4 暗褐色土・ロームブロック多量・黒褐色土ブロック・暗褐色土ブロック・しまりあり・粘性ややあり  
 30 層 10YR3/4 暗褐色土・ロームブロック多量・黒褐色土ブロック・しまりあり・粘性ややあり  
 31 層 10YR3/4 暗褐色土・ロームブロック極多量・暗褐色土ブロック・しまりあり・粘性ややあり  
 32 層 10YR3/4 暗褐色土・ロームブロック多量・しまりあり・粘性ややあり・少量の黄褐色粘土ブロック多量含む  
 33 層 10YR2/3 黒褐色土・ロームブロック多量・暗褐色土ブロック・しまりあり・粘性ややあり  
 34 層 10YR3/6 褐色土・ロームブロック中量・暗褐色土ブロック・しまりあり・粘性ややあり

### (3) 遺構外出土遺物

5 は第 2 号竪穴住居跡で出土したが、北東 2 m の位置にある第 1 号住居跡に由来するものと思われる前期後半の高杯である。

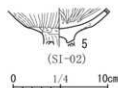


図 25 古墳時代遺構外出土遺物

## 第 4 節 時期不明の遺構（土坑・ピット以外）

遺構図については全体測量図（図 3・4）、状況は写真図版 7 を参照されたい。

### (1) 不明遺構（円形周溝状遺構）

位置：D5・6 グリッド。規模：溝の外側で南北 2.87 m、東西 2.85 m。形状・覆土等：不整形円形に囲む深さ 8 ～ 14 cm の溝である。溝の断面形は U 字状を呈し、覆土は暗褐色土で充填されている。内側に深さ 22 cm のピットが 1 基確認されている。出土遺物はない。

### (2) 道跡

位置：C・D2 グリッド。重複関係：P117・194・195 に切られる。規模：最大幅 2.24 m。走行方向：N-32°-W。環濠跡にやや並走する。形状・覆土等：ほとんど掘り込みはなく、幾分の痕を残す硬化面（一点破線の範囲）として確認された。硬化面の厚さは最大で 10 cm に及ぶ。ロームブロックを多く含む厚さ 0.5 ～ 1.5 cm の黒褐色土と暗褐色土が互層をなして形成されている。出土遺物はない。

## 第 5 節 土坑・ピット

確認した土坑・ピットについては、次のとおり覆土によって A ～ C の 3 分類したが、同時に時期を反映するものと想定している。しかし、単純に分けられないものもあり、本節ではすべての土坑・ピットを一括して扱って一覧表にして付し、注意された遺物を個別に取り上げることとした。遺構図は全体測量図（図 3 ～ 5）、状態の良いものを写真図版（10 ～ 14）に挙げたので参照されたい。

**土坑** 150 基の土坑が検出された。形態別に概観すると、①平面形が楕円形であり長軸方向が 0.7 m ～ 2 m で覆土が人為堆積を呈するもの、②平面形が円形であり覆土が人為堆積を呈するもの、③平面形が円形ないし不整形円形・隅丸方形であり U 字状断面を呈すものに大別できる。一方、一覧表中の分類については出土遺物が乏しいこともあり、覆土の状態で大別している。A は褐色土から暗褐色土が堆積しており、その覆土中のロームブロックが覆土の主体土と同色化するもの。B は暗褐色土から黒褐色土が堆積し、ロームブロックがやや同色化するもの。C は暗褐色土から黒褐色土が堆積し、ロームブロックは覆土主体土と全く同色化が認められないものである。出土遺物が伴うものからおおよそ A は縄文時代から弥生時代（第 116

号・184号ピットなど)、Bは古墳時代から古代(第13号土坑、第118号ピットなど)、Cは中・近世以降(第103号土坑〔ピットへ変更〕など)と認識した。

形態①ないし②の覆土はほぼAに該当し、人為堆積を呈するものについては墓壇を想定した。③の中には堆積状況中に柱痕跡が認められないものの柱穴が含まれているものと推測する。

**ピット** 201基が確認された。それぞれ柱痕跡の有無、柱当たり痕の有無がある。掘立柱建物跡や柵跡として認識されず用途は不明である。覆土分類については土坑と同様である。

**遺物** 第153号土坑:4は外面に竹管様の施文具によるランダムな刺突、内面には削痕あるいはナデが見られる。3は表裏に貝殻条痕が施され、上端には穿孔が掛り、補修痕と思われる。2点ともに縄文時代早期後半・条痕文系茅山式の繊維土器で、4は茅山下層式に事例が認められる。

第163号土坑:表裏に貝殻条痕が施される口縁部。同早期後半・茅山式の繊維土器である。

第1号土坑:第2号住居跡と重複することから同居由来のものと思われる。1は口縁の段部に押捺をもつものと思われる。住居跡と同じ弥生時代中期後半・宮ノ台式後半期に位置づけられるか。

第13号土坑:2は土師器杯でケズリの底面はわずかに上げ底気味となる。深身の器形で体部上半は厚手、外・底面のミガキは極めて疎らで、下総国府編年(松田2001)2b~3a期・8世紀中ごろに位置づけられる。

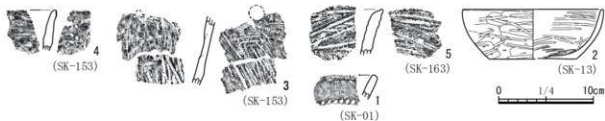


図26 土坑出土遺物

### 第3章 まとめ—調査の成果と課題—

今回の発掘調査は本遺跡において初めての本調査であった。遺跡地区では縄文時代早・後期と古墳時代中期の包蔵地とされていたが、市内でも2例目(註)となる弥生時代中期(末葉)の環濠集落であったことが明らかになるとともに、丘陵最高所の地膨れは古墳時代中期の円墳であった。確認した遺構・遺物には縄文時代早・前・中・後期、弥生時代(前・)中期、古墳時代前・中期、奈良・平安時代があり、本遺跡の消長の一端が明らかとなった。ここでは成果の主体となる弥生時代と古墳時代についてまとめておく。

#### 1 弥生時代

**集落** 3軒の堅穴住居跡のうち、環濠跡と重複する1軒(第4号堅穴住居跡)は環濠に切られることから、環濠の掘削に先立つ建物である。後述する絵画土器が覆土の焼土とともに出土しており、堅穴の平面形が小規模な方形で支柱穴や炉(環濠に切られている)が不明瞭なこと、出土土器は環濠集落のものと同期的に大きく隔たるものとは思われないことから、集落の造営に当たる一時的な使用であったことも考えられる。焼土の堆積から類推される建物の焼き払いと絵画土器の破碎・投棄は、そうした過程における(祭祀的な)行為であったのかもしれない。

環濠で囲まれる部分は約1,800㎡が調査の対象となっただけであり、内側には2軒の住居跡が確認されたに過ぎない。環濠は断面V字形で、幅・深さの規模は場所によって異なっている。大きく東半部、西半部東側(中央部)、同西側で形態・規模の変化が認められた。さらに微視的に見れば、これは環濠掘削の施工単位・作業分担を反映している可能性を考えたい。

平面的には開郭範囲の南限が捕捉できた訳であるが、位置的に東限は検出範囲の屈曲からも地形の傾斜変換線に沿うもの(概ね遺跡範囲)とみられる。北東限は台地縁辺であろう。西側は台地の肩の下へ回る状況が確認できたので、台地縁辺を進み、北西端は地形の下降する辺りで台地を横断、くちばし状地形を切断する形になるのかもしれない。この想定範囲は地形図の標高16m等高線に当たり、その面積はおおよそ16,000㎡となる(図2)。市内の戸張作遺跡の環濠範囲が9,040㎡と見積もられている(大村2005)ので、これよりも広く、佐倉市大崎台遺跡(17,690㎡)に迫る広さである。ただ、関東地方の環濠範囲の規模は2万㎡程度が一般的である(同)というので、標準的な広さであっただろうか。

環濠の覆土下層と住居跡から検出された土器は中期後半・宮ノ台式に比定されるもので、本遺跡の北北西3.5km、市内の同じ都川水系葭川左岸にある戸張作遺跡の環濠集落の成立と同調する。同遺跡の環濠は中期に構築され、北側環濠の覆土中に弥生後期の甕が投棄された状態で発見され、また、北東部では環濠同士の切り合いが認められた(菊池1998・99)。これらのことから何回かの掘り直しが行われ、後期まで利用されたと考えられている。本遺跡では覆土中位から古墳時代中期前半の高杯が検出され、堆積状況から見ても上層はそれ以降に埋没したことが明らかとなった。環濠の内側では古墳時代前期の住居跡が存在することもあり、集落の消長については今後の調査の結果を待って判断したい。

千葉県内では旧市原・君津郡域に中期の環濠集落が多く見られるが、今回の調査結果でも明らかのように、環濠自体の捕捉は不十分な部分が多い。今後の調査の推移を注視したい。

また、第3号堅穴住居跡で確認できた2本の支柱穴は覆土の柱痕跡と掘方の形状によって、横断面が長方形の板状の柱、いわゆる「五平(状)柱」(村田2013)であることが判明した。この種の柱は2005年に発見された奈良県御所市極楽寺ヒビキ遺跡の大型掘立柱建物跡(5世紀前半)の検出によって注目されたが、下総地域を始めとする関東甲信地方の弥生中・後期の堅穴住居跡においても散見されている。その意味合いについては不詳な部分があるが、今後の検討資料の一つとして挙げておきたい。

**絵面土器** 第4号竪穴住居跡で検出された粗製・小型の鉢には線刻画が記されていた。いわゆる絵面土器は図像の一部の破片で発見されることが多く中で、半完器の状態に復元でき図像の全体像が把握できた本資料の意義は大きい。線刻画についての分析は付載を参照されたいが、それによるいくつかの意匠に分解でき並列しているようであるが、抽象化していることと対比できる類例が乏しいために読み解くのは困難を極めるようである。そんな中でも内面に唯一記された「三叉文」の意匠は外面にも記されたところを見ると、この意匠が本資料の鍵となると認識できる。また、図像の大半を占める「格子状文」が諸橋千鶴子氏のご教示にあるように「ドーマン」に通ずるところがあるとすれば、なお興味深い。さらに、この線刻画を記した土器が粗製土器であり、それが破砕され焼土とともに投棄・遺棄された状況を示す今回の調査成果は、絵面土器の意味を知る上で意義のある資料を提供したものとと言えるだろう。

## 2 古墳時代

竪穴住居跡1軒と古墳1基が確認された。住居跡は前期後葉に位置づけられるもので、上記の環濠の埋没時期（中期前半）を考えると環濠自体の機能の如何は不明であるが、埋り切る前に古墳時代集落の造営が始まっていた可能性も推察される。また、今回の事業範囲の北側の宅地造成の際の試掘調査で前期の竪穴住居跡が確認されている（木口2023）というので、弥生中期の集落と重複するかたちで台地北側に展開するものと思われる。その後、中期前半に環濠集落の外、南西側に和唐地古墳が築造されることになるが、古墳以外の同時期の状況は今回の調査結果からは明らかではない。従前に中期の包蔵地と周知されていたことを積極的にとらえると、同時期の集落が展開していたことも想像される。

和唐地古墳は今回の調査によって初めてその存在が明らかにされたが、少なくとも今回の調査範囲及び事業範囲では他の古墳は確認されなかった。古墳は直径12m弱（正円復元値11.87m）の小型円墳である。確認できた墳丘は極めて低平であったが、丘陵頂部の立地を考えると封土の流失は著しかったことも想像される。埋葬施設は墳丘中心部に主軸をほぼ東西に向けて設置されている。木棺直葬が推定され、棺痕跡の幅は西側がわずかに広いものの明瞭ではなく、むしろ棺底が東側が高いことから埋葬頭位は東側と考えるのが穏当であろう。また、前章で想定した木棺型式は箱形の「組立式木棺」で、赤塚次郎が愛知県豊田市川原遺跡の報告書で弥生時代後期～古墳時代初頭の墳丘墓に指摘したものである（赤塚2001）。いわゆる「持ちこぶ棺」ではなく「据えつける棺」を裏付けるものである（和田2014）。ほぼ未盗掘の状態を確認されたが、内部には副葬品は皆無であった。立地は丘陵最高所を単独で占地する好条件であるものの、その内実は貧弱であると言わざるを得ない。第1章第2節で触れた石神2号墳と比べると、その差は歴然であり、長原 亘が評した当地域の墳墓の状況を如実に表している。

今回の調査の主な成果は以上であるが、本遺跡だけでも未解明な部分を多く残している。今後の調査の地域史解明の礎となることを期待して拙筆とする。最後となりましたが、今回の調査にご協力ご支援いただきました事業主の方をはじめ、地域住民の皆さまに感謝申し上げます。

### 註

花見川区武石道跡で発見された断面V字形の溝が環濠であったとしたら、これを加えて3例となる（市生涯学習センター エントランスホール展示より）。

## 参考文献

- 赤塚次郎 2001「墳丘墓と槽形木棺墓について」赤塚編『川原遺跡』第2分冊 愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第91集 (財) 愛知県教育サービスセンター愛知県埋蔵文化財センター
- 大村 直編 2005『市原市根田代遺跡』土総国分寺台遺跡調査報告書XIII (財) 市原市文化財センター調査報告書第92集 市原市教育委員会・(財) 市原市文化財センター
- 大村 直 2005「市原市域の弥生時代中期遺跡集落群と後期集落」大村編『市原市根田代遺跡』(前掲文献)
- 大村 直 2009「南中台遺跡と周辺遺跡の土器編年」大村編『市原市南中台遺跡・荒久遺跡A地点』市原市埋蔵文化財調査センター調査報告書第10集 土総国分寺台遺跡調査報告書X 市原市教育委員会
- 加藤修司 2000「土器編年案」『千葉県文化財センター研究紀要』21 (財) 千葉県文化財センター
- 加藤修司 2005「草刈遺跡土器編年の検証」『(財) 印旛郡市文化財センター研究紀要』4 (財) 印旛郡市文化財センター
- 菊池健一ほか 1988『立木南遺跡』千葉市教育委員会・(財) 千葉市文化財調査協会
- 菊池健一 1998・99『千葉市戸張作遺跡』I・II 千葉市東寺山第三土地区画整理組合・(財) 千葉市文化財調査協会
- 木口裕史 2023「和唐地遺跡・琵琶台遺跡」木口編『埋蔵文化財調査(市内遺跡) 報告書』一令和4年度一 千葉市教育委員会
- 木原高弘 2012「集落出土土器等の様相—各期の土器等の特徴」白井久美子・黒沢 宗編『研究紀要』27 古墳時代中期の房総—中期的要素の波及とその評価— (財) 千葉県教育振興財団
- 黒板勝美 1979『新訂増補 國史大系』續日本紀(普及版) 國史大系編修会、吉川弘文館(宝龜2年10月条、p.394)
- 黒沢 浩 1997「房総宮ノ台式土器考—房総における宮ノ台式土器の枠組み—」『史館』第29号 史館同人
- 小林 嵩 2022「千葉市の弥生土器・石器—猪鼻城跡—」千葉市史編集委員会編『千葉いまわかし』第35号 千葉市教育委員会
- 小林 嵩・植木雅博 2023「千葉市の弥生土器—新田山遺跡—」千葉市史編集委員会編『千葉いまわかし』第36号 千葉市教育委員会
- 鈴木道之助ほか 1986『千葉県埋蔵文化財分布地図』(2) 一千葉市・香取・海上・匝瑺・山武地区— 千葉県文化財センター調査報告第122集 (財) 千葉県文化財センター
- 田川 良 1983『井合遺跡調査報告書』千葉市遺跡調査会
- 武田宗久ほか 1974「弥生時代の主な遺跡」千葉市史編纂委員会編『千葉市史』第1巻 原始古代中世編 千葉市
- 武田宗久ほか 1984『千葉市文化財調査報告書』第10集 谷津遺跡 千葉市文化財調査協会編、千葉市教育委員会
- 田中英世 2007『千葉市高台向遺跡・猪鼻城跡』千葉市教育委員会・(財) 千葉市教育振興財団埋蔵文化財調査センター
- 田中英世・菊池健一 1990『千葉市古山遺跡』(財) 千葉市文化財調査協会
- 長原 亘 2009「千葉市の古墳時代概観—古墳の分布傾向から—」千葉市史編集委員会編『千葉いまわかし』第22号 千葉市教育委員会
- 中村志次 1979「千葉市石神2号墳」『房総古墳論攷』真福社、故中村志次氏著作集刊行会
- 沼澤 豊ほか 1977『東寺山石神遺跡』(財) 千葉県文化財センター・日本道路公団東京第一建設局・建設省関東地方建設局
- 野中 龍ほか 2000『東条地区遺跡群発掘調査報告書』—発掘整備事業(大区画) 東条地区に伴う埋蔵文化財調査— 鴨川市遺跡調査会埋蔵文化財調査報告第6集 鴨川市教育委員会ほか
- 萩原恭一 1986「千葉市大北遺跡の検討—律令制下東國の一様相—」『千葉県文化財センター研究紀要』10—千葉県文化財センター10周年記念論集— (財) 千葉県文化財センター
- 松田礼子 2001「下総国府の土器編年」松本太郎編『下総国府跡』一国府台遺跡緊急確認調査報告書— 市川市教育委員会
- 村田文夫 2013「五平(状) 柱を主柱穴に据えた弥生期の壑穴住居跡—弥生中・後期における調査・研究の現状—」村田『関東の古代遺跡道』六—書房
- 山本 勇編 1984「星久喜遺跡発掘調査報告書」『千葉市文化財調査報告書』第8集 千葉市教育委員会
- 和田晴吾 2014『『据えつける棺』と『持ちはこぶ棺』』和田『古墳時代の葬制と他界観』吉川弘文館
- 渡辺修一 1991『千葉市荒久遺跡』(3) 一県立青葉の森公園建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書— 千葉県文化財センター調査報告書第193集 (財) 千葉県文化財センター編、千葉県都市部
- 渡辺修一 1992『千葉市地蔵山遺跡』(1) 一住宅・都市整備公団千葉寺地区埋蔵文化財発掘調査報告書— 千葉県文化財センター調査報告書第206集 (財) 千葉県文化財センター編、住宅・都市整備公団首都圏都市開発本部
- 渡辺修一 2004「壑棺再葬墓」『千葉県の歴史』資料編 考古4(遺跡・遺構・遺物) 県史シリーズ12 (財) 千葉県史料研究財団

表 2 出土遺物観察表

## 遺構外出土遺物

番号	注記	種類	現存	口径	器高	底径	胎土	成・整形の特徴	色調	備考
1	E6 グラッド	縄文 土器	口縁部	-	(4.2)	-	褐色・骨針・角・赤・白・透・砂	内外ヨコ筒腹	7.5YR5/4 に近い	
2	E3 グラッド	縄文 土器	胴部	-	(7.7)	-	骨針・角・白・透・砂	外：左上半縦竹管条痕、頸部竹管押込み2段、筒を組めへつれみ白。内：ナデ	5YR5/6 明黄褐色	
3	S21-B 区、SD1-B トレンチ	縄文 土器	口径 1/10 ~ 胴部 1/3	(22.6)	(15.8)	-	赤(多)・白・透・砂	外：縄文Ⅰ、横回転一胴部左上弧状条痕、口縁部ヨコ条痕→口縁・胴部隆起・指押込。内：ヨコヘラナデ、口縁部内面沈線	7.5YR5/6 明褐色	
4	S12-C 区	縄文 土器	口縁→胴上半部	-	(8.6)	-	骨針・赤・白・透・砂	外：縄文ⅠB 横回転→口縁隆起・指押込。内：ナデ	10YR6/4 に近い、黄褐色	

## S102 出土遺物

1	No4	弥生 土器	口縁完形	-	(22.2)	5.8	砂質、白・透(多)・砂	外：胴下半部左上へク、口縁→胴上半部ヨコヘラ→胴部段にへつれみ、胴部に幅 4 本横条状伏文、内：胴部左上へラナデ、口縁→胴部ヨコヘラ	7.5YR6/6 褐色	外面口縁→胴上半部隆起付着、下半部被熱赤化、内面胎子付着。口縁部磨耗
2	No2	弥生 土器	口縁部	-	(3.4)	-	骨針・白・透・砂	外：ヨコナデ。内：ヨコナデ、口縁部隆起伏文1段、胴部縮3本横条状伏文	10YR6/6 明黄褐色	外面隆起付着
3	B1 No20	弥生 土器	口縁→胴上半部	-	(10.2)	-	砂質、白・透(多)・砂	外：胴中位左上へク。内：胴部右上へク、口縁部ヨコガキ。口縁部間交互押込	7.5YR6/6 褐色	外面被熱赤化、隆起付着
4	No35	弥生 土器	口縁 2/5 ~ 底部完形	(9.3)	7.7	4.2	骨針、チャ、黄(多)・白・透・砂	外：左上へク→タテガキ、4 単位段状口縁、口縁部部へつれみ、底部粘土充填・上へラ	5YR5/4 に近い、黄褐色	内外面赤化
5	No7	弥生 土器	口縁→胴中位 2/3	(5.0)	(17.0)	-	骨針・黄(多)・白・透・砂	外：ナデ。内：ナデ	5YR4/4 赤褐色	内外面赤化
6	No1	弥生 土器	口縁→胴部ほぼ完形	7.0	(11.6)	-	砂質、白(多)・透(多)・砂	外：胴部タテガキ・赤筋、口縁部隆起伏付文 2 本段方向→口縁隆起、外面・胴部結縄文 H 多段、胴部段同斜突、内：口縁部ヨコガキ、胴→胴部割部	7.5YR6/8 褐色	
7	No26、C・D 区	弥生 土器	口縁部 3/5	7.6	(2.9)	-	砂質、骨針・白・透(多)・砂	ナデ、口縁部 1 本方向隆起伏付文→内外赤筋	7.5YR7/6 褐色	
8	C 区	弥生 土器	口縁部	-	(1.8)	-	骨針(多)・透・砂	外：ヨコガキ。内：下半部ヨコガキ、口縁部内面縄文1段	10YR6/4 に近い、黄褐色	
9	C 区、一括	弥生 土器	胴→胴部 1/3	-	(11.0)	-	砂質、骨針・角・赤・白(多)・透・砂	外：上段 5 本筋段状伏文 3 段→上ヨコ本、下 2 本筋段横縄文区画、下段同段状→上 2 本、下 3 本横縄文区画→胴部・無文赤筋→胴部タテガキ・無文赤筋ヨコガキ。内：ナデ、胴部割部	7.5YR5/4 に近い、黄褐色	
10	No2	弥生 土器	胴部ほぼ完形	-	(14.7)	-	砂質、骨針(多)・白(多)・透(多)・砂	外：赤筋→タテガキ、内：ナデ→上半部赤筋→中位タテ・上部左上へク、上下端打ち欠き磨耗	10YR6/4 に近い、黄褐色	
11	No19+20・21、C 区	弥生 土器	胴上半部	-	(15.8)	-	砂質、骨針・白(多)・透・砂	外：中位結縄文 1R 多段→無文筋・胴中位ヨコガキ、内：割部	10YR6/4 に近い、黄褐色	赤筋不明瞭
12	No4、C 区	弥生 土器	口縁部	-	(2.8)	-	骨針・白・透・砂	内外赤筋→ヨコガキ。口縁部有孔耳状突起	7.5YR5/6 明褐色	
13	C 区	弥生 土器	口縁部	-	(3.0)	-	砂質、白・透(多)・砂	外：胴 10 本筋文→無文筋ヨコガキ。内：ヘラナデ	10YR6/6 明黄褐色	
14	B No6・6・B・10・11・14・19→一括、A・C 区、一括	弥生 土器	胴上半 1/3	-	(8.7)	-	骨針(多)・白・透・砂	外：左上へク→赤筋、内：横ヘラナデ	10YR5/4 に近い、黄褐色	上下端部打ち欠き磨耗
15	No9、C 区	弥生 土器	胴下半→底部完形	-	(6.8)	3.7	砂質、骨針・赤(多)・透(多)・白・透(多)・砂	外：厚減、内：割部	10YR7/4 に近い、黄褐色	
16	B No18・19→一括、A 区	弥生 土器	胴→胴中位 3/5	-	(16.9)	-	骨針・白・透・砂	外：胴下半部左上へク、中位ヨコヘラ→胴部ヨコナデ。内：縦ヘラナデ・縁にタテガキ	7.5YR5/4 に近い、黄褐色	上下端部打ち欠き磨耗、外面被熱赤化、下底白化
17	No16+19・21	弥生 土器	胴下半→底部完形	-	(6.9)	7.5	砂質、骨針・白・透(多)・砂	外：タテガキ。内：割部	10YR5/6 黄褐色	底面周縁隆起
18	B No1	弥生 土器	底部完形	-	(2.9)	10.8	骨針・チャ・白・透(多)・砂	外：左上へク。内：ヘラナデ、底：ケズリ	7.5YR5/6 明褐色	

## S103 出土遺物

1	No9	弥生 土器	胴部 2/5 ~ 底部完形	-	(15.5)	5.4	骨針・赤・白・透・砂	外：左上へク→幅 4 本横条状伏文。内：タテガキ、底：ケズリ	10YR6/6 明黄褐色	外面胴下半部隆起付着、上下 2 片に分離
2	No10	弥生 土器	口縁 1/5 ~ 胴部	(18.0)	(6.0)	-	骨針(多)・白・透・砂	外：左上へク→幅 4 本横条状伏文。内：ヨコヘラ。口縁部内面指押込	外：10YR7/2 に近い黄褐色内：7.5YR6/6 褐色	外面隆起付着
3	No10	弥生 土器	口縁部	-	(3.2)	-	骨針・白・透(多)・砂	外：左上へク→胴部隆起文。内：胴部ヨコガキ。口縁部隆起縄文1段	外：10YR4/3 に近い黄褐色内：10YR5/4 に近い黄褐色	外面隆起付着

番号	注記	種別	図種	現存	口徑	器高	口径	胎土	成・彫刻の特徴	色調	備考
4	No10	陶生	底部3/4	-	(3.0)	5.2	白・透・砂	外：タテハク。内：ナデ		10YR5/4 に近い黄褐色	外面僅付着
5	No7	陶生	口縁部	-	(3.1)	-	骨針・白・透・砂	コソナデ。口縁部内面彫刻		10YR5/4 に近い黄褐色	
6	D IC	陶生	胴部	-	(3.3)	-	骨針・赤・白・透(多)・砂	外：左上ハケ→ヘラ柄と格子文。内：タテミガキ		10YR5/4 に近い黄褐色	外面僅付着
7	No4・5、A IC	陶生	底部完存	-	(3.1)	6.0	赤・黄(多)・白・透・砂	外：ナデ。内：ナデ		7.5YR5/4 に近い赤褐色	外面彫化
8	B IC	陶生	底部	-	(4.1)	-	テヤ・白・透・砂	外：左上ハク。下縁押捺。内：ナデ		7.5YR4/4 程度	外面僅付着。内面削り付着
9	No1・3	陶生	口縁部1/4	(21.0)	(5.5)	-	骨針(多)・テヤ・白・透・砂	外：赤彩→コソミガキ。口縁部・端面コソナデ→有孔耳状突起2本方向不明→横文1R。内：赤彩→コソミガキ		7.5YR5/4 に近い赤褐色	
10	B IC	陶生	口縁部	-	(4.2)	-	白・透・砂	外：ナデ→羽状横文R・1具。端面横文1R。内：ナデ		2.5YR6/6 明黄褐色	

### S101 出土遺物

1	No24	陶生	口縁部1/9	(13.0)	(2.5)	-	骨針・白・透・砂	外：口縁部・端面横文1R。胴部コソミガキ。内：コソミガキ		7.5YR5/6 明褐色	
2	No6・7・8、22	陶生	胴上半部2/3	-	(8.6)	-	骨針・黄(多)・白・透・砂	外：左上ナデ→胴上半部タテミガキ。内：ヘラナデ		外：5YR4/6 赤褐色 内：10YR4/2 IC 黄褐色	
3	No18	陶生	胴部2/3	-	(2.3)	4.9	骨針・黄(多)・白・透・砂	外：ヘラナデ。内：ミガキ		2.5YR4/4 に近い赤褐色	内外面彫化
4	No17・18、21	陶生	胴ほぼ完存→胴下半部	10.5～11.5	(7.6)	-	骨針・黄(多)・白・透・砂	外：右上ヘラナデ。内：ミガキ。上半部陶心		2.5YR4/4 に近い赤褐色	内外面彫化

### S01 出土遺物

1	G IC No3	陶生	口縁1/3～底部完存	(14.0)	15.3	5.3	骨針・白・透・砂	外：胴下半部コソナデ→上半部左下ヘラナデ。内：コソナデ→タテミガキ。口縁部彫刻押捺・爪痕跡付。底部中心盲孔		10YR7/6 明黄褐色	外面胴上半部僅付着。口縁部削り付着
2	F IC	陶生	胴部	-	(5.3)	-	骨針(多)・白・透(多)・砂	外：左上削痕。内：コソナデ→タテミガキ		7.5YR5/6 明褐色	
3	G IC No4	陶生	胴→胴部2/5	-	(3.9)	-	白・透・砂	外：胴部コソハク。胴部タテミガキ。内：削痕		10YR7/4 に近い黄褐色	
4	F IC No2	陶生	胴部1/8	-	(6.5)	-	骨針・黄(多)・白・透・砂	外：コソハク→胴・胴部結節横文R 多段→無文帯赤彩。内：削痕		7.5YR5/4 に近い赤褐色	胴部結節横文帯の下に斜横文1R(縦回転)の当たりあり
5	Bトレンナ(No)・2・3	古墳	口縁1/6～杯下半部完存	(20.0)	(8.6)	-	赤(多)・白・透	外：ナデ→赤彩。内：ナデ。一部ケツ状→赤彩		5YR8/6 程度	

### S101 出土遺物

1	No1	古墳	口縁→胴中位2/3	(29.0)	(18.5)	-	砂質。白・透(多)・砂	外：コソナデ。内：口縁→胴上半部コソナデ。下半部黒ミガキ。口縁部彫刻交互押捺		7.5YR5/6 明褐色	外面僅付着
2	No2	古墳	完形	18.5	18.8	7.0	黄・白・透・砂	外：胴中位コソナデ。内：口縁部コソナデ。胴下半部ミガキ		5YR4/6 赤褐色	外面口縁→胴中位僅付着。内面全面彫化・削り付着。胴部の対面する二か所に黒粒あり
3	No12、C IC	古墳	完形	21.2	25.0	7.5	黄・赤・白・砂	外：胴部左上ハク。底部ケツ。内：ヘラナデ。底：ケツ		5YR5/6 明赤褐色	底 灰 粒 粘 女 土 広 凹
4	No2・3・2・16	古墳	口縁部1/8→胴部ほぼ完形	(18.2)	16.3	7.0	赤・白・透・砂	外：左上ハケ→胴部コソハク。胴下半部左上ケツ。内：胴部タテミガキ。白縁→胴部コソハク。底本彫刻。口縁部コソナデ。胴部ヘラミガキ目目		2.5YR4/6 赤褐色	外面全面僅付着。内面彫化。二次焼成→2.5YR5/6 赤褐色
5	No5	古墳	口縁部完存→胴部	17.3	(8.0)	-	黄(多)・赤・白・透(多)・砂	外：ナデ。内：ヘラナデ。口縁部コソナデ。胴部ハク工具跡目目		5YR5/4 に近い赤褐色	内外面口縁部無付着
6	No3	古墳	完形	32.4	18.8	5.0	赤(多)・白・透・砂	外：右上ヘラナデ。底部左下ケツ。内：ナデ。底：黒ミガキ。底：ケツ。底部穿孔		7.5YR5/4 に近い赤褐色	二次焼成。二次焼成に2.5YR5/6 赤褐色
7	No1	古墳	口縁部1/3→胴・底部完存	(10.3)	13.5	4.5	黄(多)・白・透・砂	外：左上ハケ→胴下半部右ケツ。内：ナデ。底：ケツ。上げ皿。口縁部コソナデ		7.5YR4/6 程度	二次焼成。二次焼成に2.5YR5/6 赤褐色
8	C IC	古墳	胴台底部3/4	-	(5.5)	10.8	黄(多)・赤・白・透(多)・砂	外：ヘラナデ。内：ハケ		10YR5/4 に近い黄褐色	二次焼成に2.5YR5/6 赤褐色
9	No4・8・16	古墳	完形	19.2	12.6	11.2	骨針・黄(多)・赤・白・透・砂	外：杯部ヘラナデ。胴部タテミガキ。内：杯部タテミガキ使ミガキ。胴部ナデ。目目透孔3孔方向		外：10YR5/4 に近い黄褐色 内：2.5YR5/6 明赤褐色	二次焼成に2.5YR5/6 赤褐色
10	No14	古墳	杯部完存	14.0	(5.9)	-	黄(多)・白・透(多)・砂	外：ヘラナデ。内：ナデ→縁のなびミガキ		2.5YR5/6 明赤褐色	二次焼成。内面彫化
11	No13	古墳	口縁部1/3→胴部完存	(7.4)	9.2	9.9	骨針・黄(多)・白・透(多)・砂	外：ハケ→胴部タテミガキ。内：受け部ミガキ。胴部ハク。接合部穿孔。胴部円形透孔3孔方向		2.5YR5/6 明赤褐色	
12	No11	古墳	胴→胴部中位	-	(14.9)	-	黄(多)・白・透・砂	外：タテハク。内：ナデ		5YR5/4 に近い赤褐色	二次焼成に2.5YR5/6 赤褐色
13	No8	古墳	胴→胴下半部2/5	-	(15.2)	-	肌理細小。骨針・白・透・砂	外：ハケ→タテミガキ。内：ナデ		10YR6/4 に近い黄褐色	二次焼成

番号	注記	種類	形状	現存	口径	器高	口径	胎土	成・彫形の特徴	色調	備考
14	No10	古墳	古墳	口縁部5/6～ 胴部中位迄存	11.8	(12.7)	-	黄(多)・白・透・ 砂	外：ヘラナデ。胴下半部クワガキ。内：ヘラナデ	7.5/85/4 に 近い	二次焼成。内面黒化
15	No9	古墳	古墳	ほぼ完成形	8.4	11.5	3.6	骨針(多)・黄・白・ 透	外：左上へナケ一筋下半部右下クズリ。内：底部・ 口縁部へナケ。口縁部ココナデ。底：クズリ	10/98/4 に近い 黄緑	
16	No7	古墳	古墳	ほぼ完成形	12.0	5.1	4.0	骨針(多)・黄・白・ 透(多)	外：クズリ。内：ナデ。底：クズリ。平土。口 縁部内面に底面	7.5/86/6 程度	二次焼成。黒化

### SO1 出土遺物

1	A区周溝	古墳	古墳	口縁部	-	<3.9>	-	骨針・赤・白・透	ココナデ	10/98/4 に近い 黄緑	
2	B区	古墳	古墳	底面1/3	-	<1.8>	(7.0)	白・透・砂	外：ナデ。赤鉄。内：ヘラ。底：クズリ	7.5/84/4 程度	
3	B区	古墳	古墳	口縁部	-	<3.0>	-	赤(多)・白・透・ 砂	ココナデ	10/95/4 に近い 黄緑	
4	B区周溝内 (No1)	古墳	古墳	口縁・杯上半 部	-	<4.0>	-	骨針(黄)(多)・赤・ 白・砂	外：ヘラナデ。内：ナデ	10/98/4 に近い 黄緑	

### 土坑出土遺物

5	SK2-No3	古墳	古墳	杯下半～接合 部	-	<4.2>	-	白・透・砂	外：杯上半部クワガキ。下半部コクズリ。胴 部クワガキ。内：杯高クワガキ。胴部内面透 孔。乳3方向	7.5/86/6 程度	
4	No1	縄文 土器	縄文 土器	口縁部	-	<4.3>	-	縄文・骨針・角・赤・ 白・透・砂	外：破裂。内：コ割痕	5/95/6 明赤焼	
3	SK153No1, SK154No1	縄文 土器	縄文 土器	胴部	-	<7.3>	-	縄文・ハ・赤・黒・ 白・透・砂	内外左上具段条痕	5/95/6 明赤焼	上部に外面穿孔跡 群孔あり
5	一括	縄文 土器	縄文 土器	口縁部	-	<4.8>	-	縄文(多)・骨針・ 赤・白・透・砂	内外コ貝段条痕	5/95/4/3 程度	
1	SK1	弥生 土器	弥生 土器	口縁部	-	<2.6>	-	砂質。ナヤ・赤・白・ 透・砂	ナデ。口縁部底面文1筋。口縁部下腹面突文 (工具不明)	10/98/4 に近い 黄緑	
2	SK13No1	土師 器	土師 器	口縁1/10～ 底面1/3	(14.7)	5.2	(9.3)	赤(多)・白・透・ 砂	外：コクズリ一筋にコクワガキ。内：ナデ一筋 にクワガキ。底：一方向クズリ。一部器年	5/95/6 明赤焼	

表3 土坑一覽表

番号	Gr	平面形状	長軸方向	長軸	短軸	深さ	断面形状	ピット	覆土	分類	出土遺物	重要関係
SK01	D3	円形	N-39°-E	105	101	45	罐底状	有	人高		弥生中期前	> SK02
SK02	D3	楕円形	N-6°-E	156	125	58	不整形	無	人高			
SK03	D3	楕円形	N-9°-E	156	85	96	不整形	無	人高		弥生中期前	> SK02
SK08	H4.5	楕円形	N-37°-E	92	64	13	蓋状	無	自然	A	弥生中期前	
SK09	H5	円形	N-50°-W	104	97	15	蓋状	無	自然	A		
SK10	H5	楕円形	N-52°-E	63	30	13	器台形	無	自然	A		
SK11	H5	楕円形	N-37°-W	78	58	15	器台形	無	自然	A		
SK12	H6.5	楕円形	N-42°-E	118	92	18	器台形	無	人高	A		
SK13	C5	角丸長方形	N-9°-W	224	110	43	罐底状	無	人高	B	BC土師器群、弥生土器、古 墳中期高杯、杯土器	
SK15	C5	楕円形	N-4°-E	119	105	16	有段縁鉢状	無	自然	A		
SK17	C6	円形	N-41°-W	80	68	14	蓋状	無	自然	A		
SK18	C6	不整形	N-40°-W	95	80	33	U字状	無	人高	A		
SK19	C6	不整形	N-48°-W	100	89	24	U字状	無	自然	A		
SK23	C,D6	楕円形	N-5°-E	86	70	21	罐底状	無	自然			
SK27	D7	円形	N-87°-E	75	64	23	罐底状	無	自然	A		
SK28	D7	円形	N-69°-E	91	80	14	蓋状	無	人高	A		
SK29	D7	円形	N-37°-E	89	77	13	蓋状	無	人高	A		> SK30
SK30	D7	楕円形	N-90°-E	91	70	23	U字状	無	人高	A		< SK29
SK34	D7	方形	N-82°-E	72	62	20	罐底状	無	人高	B		
SK35	D6,7	楕円形	N-90°-E	102	83	36	罐底状	無	人高	C		
SK36	D6	楕円形	N-24°-E	109	92	22	罐底状	無	人高	B		
SK37	D6	楕円形	N-3°-E	169	115	27	器台形	無	人高	B		
SK38	D6	楕円形	N-74°-E	103	73	27	罐底状	無	人高	C		
SK39	C,D5	楕円形	N-86°-E	72	60	29	縁鉢状	無	自然	B		
SK40	C5	楕円形	N-85°-E	80	65	28	器台形	無	自然	B		
SK41	D6	楕円形	N-9°-W (120)	103	60	不整形	無	自然			> SK42	
SK42	D6	楕円形	N-28°-W (150)	116	26	蓋状	無	自然			弥生中期後	< SK41
SK43	D5	楕円形	N-18°-E	108	90	19	器台形	無	人高	B		
SK44	D5	楕円形	N-62°-W	90	72	18	蓋状	無	人高	B・C		SK45
SK45	D5	楕円形	N-40°-E	98	81	17	器台形	無	自然	A・B		SK44
SK47	D5	楕円形	N-85°-E	75	65	40	縁鉢状	無	人高			
SK48	C5	楕円形	N-59°-E	75	57	19	蓋状	無	人高	B		
SK49	C,D5	楕円形	N-60°-W	104	78	20	器台形	無	自然			
SK50	C4,5	角丸方形	N-41°-W	115	140	14	器台形	無	人高	B		
SK51	C4	楕円形	N-34°-E	70	60	18	器台形	無	人高	B		
SK52	C4,5	円形	N-15°-E	103	110	16	器台形	無	人高	A		
SK53	D4	楕円形	N-28°-W	85	63	20	U字状	無	人高	A		
SK54	D4	楕円形	N-8°-W	90	74	28	罐底状	無	人高	A		
SK55	D4	楕円形	N-4°-E	80	60	24	罐底状	無	人高	A		



SK56	D5	角丸方形	N-57	-E	166	120	24	溝底状	無	自然	A	
SK57	D4	円形	N-40	-W	65	60	22	溝底状	無	人為	B	
SK58	D4	楕円形	N-35	-E	138	(100)	23	溝底状	無	人為	B	P35
SK60	D4.5	楕円形	N-46	-E	135	115	19	溝底状	無	人為		
SK62	D41.5	円形	N-56	-W	110	90	22	溝底状	無	人為	B	P81
SK63	E5	円形	N-22	-E	(120)	126	22	U字状	無	人為	B	SK64, > P38
SK64	E5	不整形	N-74	-E	(185)	150	17	溝底状	有	自然	B	原産地不明
SK65	E4	楕円形	N-14	-E	188	139	47	U字状	無	人為	B	SK63,F38
SK66	E4	楕円形	N-18	-E	157	97	14	溝底状	有	自然	B	< P73
SK67	E4.5	円形	N-37	-E	71	65	18	溝底状	無	人為	B	
SK68	E5	円形	N-12	-W	84	78	16	溝底状	無	人為	B	
SK69	E5	楕円形	N-7	-E	72	50	13	溝底状	無	人為	B	
SK70	E5	楕円形	N-70	-E	151	124	25	溝底状	無	自然	B	
SK71	DJ15	円形	N-5	-E	63	60	17	溝底状	無	人為	B	
SK72	D5	円形	N-2	-E	66	26	28	U字状	無	人為	B	> SK73,P42
SK73	D5	円形	N-44	-W	60	36	18	U字状	無	自然	B	< SK72
SK75	E6	楕円形	N-15	-E	76	61	15	溝底状	無	人為	B	SK76
SK77	E6	円形	N-77	-E	70	65	14	溝底状	無	自然	A	
SK79	E6	楕円形	N-4	-W	80	63	32	溝底状	無	人為	B	
SK80	E6	楕円形	N-20	-E	106	90	36	不整形	有	人為	B	SK82
SK81	E,F6	楕円形	N-10	-E	87	83	19	並行形	無	人為	A	
SK82	E6	楕円形	N-90	-E	128	(26)	43	不整形	無	人為	B	SK80
SK83	E5	円形	N-10	-W	52	48	13	溝底状	無	人為	A	
SK84	E5	円形	N-96	-E	(70)	63	21	不整形	無	人為	A	SK87, < P74
SK85	E,F5	楕円形	N-23	-W	(115)	94	26	溝底状	無	人為	A	> SK86,SK87,P74
SK86	E,F5	不整形	N-90	-W	70	(22)	23	溝底状	無	人為	A	< SK85, < P73,P74
SK87	E5	不整形	N-86	-W	52	47	15	溝底状	無	人為	B	SK84,E5, > P76
SK89	E,F5	楕円形	N-44	-E	97	(53)	18	溝底状	無	人為	A	< P77
SK90	E5	楕円形	N-56	-E	153	105	15	溝底状	無	自然	A	
SK91	E5	円形	N-50	-E	61	60	32	U字状	無	人為	B	
SK92	E5	円形	N-48	-E	85	82	19	溝底状	無	人為	B	P37
SK93	E4	楕円形	N-40	-E	85	69	17	溝底状	無	人為	A+B	P87
SK94	E4.5	楕円形	N-70	-W	102	75	18	溝底状	無	人為	A	P93
SK99	E4.5	円形	N-61	-E	87	80	24	不整形	無	人為	A+B	
SK100	E4	楕円形	N-50	-E	70	53	23	溝底状	無	人為	C	
SK101	E4	楕円形	N-16	-W	123	85	10	溝底状	無	人為	A	< P90
SK106	E4	楕円形	N-27	-W	130	93	15	溝底状	無	自然	A	< SK105, > 107
SK107	E4	楕円形	N-22	-W	92	63	13	溝底状	無	自然	A	< SK106
SK108	E4.5	角丸長方形	N-13	-W	60	70	24	溝底状	無	人為	A	< P95
SK109	EJ,4	円形	N-12	-E	91	80	10	溝底状	無	人為	A	縄文期石
SK110	E3	楕円形	N-55	-E	(56)	(53)	18	溝底状	無	人為	A	SK111, < P102
SK111	E3	円形	N-20	-W	90	85	15	溝底状	無	人為	A	SK110, > P102
SK112	E3	楕円形	N-14	-W	65	52	11	溝底状	無	人為	A	> SK113
SK113	E3	楕円形	N-7	-E	(75)	59	14	溝底状	無	人為	A	< SK112
SK114	E3	楕円形	N-31	-E	120	90	20	溝底状	無	人為	A	> SK01
SK115	E3	楕円形	N-40	-W	103	76	27	溝底状少	無	人為	A	
SK117	E3	楕円形	N-11	-W	101	67	30	溝底状	無	人為	B	
SK118	E3	楕円形	N-20	-E	135	100	21	溝底状	無	人為	A	
SK119	D,E3	不整形	N-35	-E	228	109	32	不整形	無	人為	A	
SK120	D4	楕円形	N-62	-E	88	65	21	U字状	無	人為	A	
SK121	E3	楕円形	N-45	-W	131	113	20	溝底状	無	自然	A	縄文期石
SK122	E3	円形	N-45	-W	(51)	105	16	溝底状	無	自然	A	< SK122
SK124	D3	円形	N-24	-E	117	100	22	不整形	無	人為	A	> SK125
SK125	D3.4	楕円形	N-106	-E	(105)	120	16	溝底状	無	自然	A	< SK124, > 126,135
SK126	D4	楕円形	N-94	-E	(80)	90	19	溝底状	無	自然	A	< SK125, > 135
SK127	D4	円形	N-87	-E	26	(55)	21	U字状	無	人為	A	> SK128
SK128	D4	円形	N-84	-W	57	143	12	溝底状	無	人為	A	> SK127
SK131	E3	円形	N-7	-W	55	45	21	楕円状	無	人為	A	
SK132	E3	楕円形	N-8	-E	113	102	28	並行形	無	人為	A	SK136
SK134	E3	楕円形	N-87	-W	140	116	32	有段楕円状	無	人為	B	
SK135	D4	楕円形	N-46	-E	(70)	95	16	溝底状	無	自然	A	< SK125, < 126
SK136	D3	楕円形	N-45	-E	139	(95)	23	溝底状	無	人為	A	SK141,142,143
SK137	D3	楕円形	N-3	-E	164	124	28	溝底状	無	人為	A	
SK138	E2	円形	N-18	-W	110	107	26	溝底状	無	自然	A	
SK139	E5	円形	N-5	-E	60	60	18	溝底状	無	人為	A	P97
SK141	DJ,D3	楕円形	N-60	-E	192	135	30	楕円状	無	人為	A+B	SK136, < 140
SK142	D3	楕円形	N-67	-E	120	100	31	溝底状	無	人為	A	SK136, > 143
SK143	D3	円形	N-22	-W	67	50	30	溝底状	無	人為	A	< SK136,142, < 144
SK144	D3	円形	N-33	-W	129	120	25	溝底状	無	人為	A	
SK145	D3	楕円形	N-25	-W	141	(85)	47	溝底状	無	人為	B	> SK146
SK146	D3	楕円形	N-22	-W	147	100	45	溝底状	無	人為	B	< SK145, < P113
SK147	C3	楕円形	N-53	-W	182	104	30	溝底状	無	自然	A	
SK148	C3	方形	N-50	-E	105	94	43	U字状	無	人為	C	> SK139
SK149	C2	楕円形	N-26	-W	80	62	22	溝底状	無	人為	A	> P114
SK150	E3	楕円形	N-53	-E	127	105	40	溝底状	有	自然	A	
SK151	D2	楕円形	N-65	-W	116	86	29	溝底状	無	人為	A	
SK152	D2	楕円形	N-90	-E	123	110	30	溝底状	有	人為	A	
SK153	D2	楕円形	N-7	-W	174	130	28	溝底状	無	自然	A	縄文期石

SK154	D2	横内形	N-51°-W	140	110	32	縄底状	無	人為			> SK01, < SK153
SK155	D2	円形	N-16°-E	85	73	23	縄底状	無	人為	A		< P119, > I20
SK156	B3	横内形	N-4°-W	0(2)	80	23	縄底状	無	人為	B		< SK132
SK157	C2	横内形	N-35°-W	135	100	34	縄底状	無	自然	A	縄文石器剥片・縄土器, 古墳中期層	
SK158	C2	横内形	N-65°-W	115	86	25	土状	無	人為	A		
SK159	C3	円形	N-72°-E	80	78	28	縄底状	無	人為	A		< SK18, < I60
SK160	C3	横内形	N-44°-E	75	56	34	縄底状	無	人為	A		> SK139
SK161	C3	横内形	N-32°-E	125	95	31	縄底状	無	人為	A		SK162
SK162	C3	角丸長方形	N-30°-E	60	43	22	縄底状	無	人為	C	古墳前期土器	SK161
SK163	B2	横内形	N-10°-W	100	88	28	縄底状	無	人為		縄文糸織文土器	
SK164	B,C2	横内形	N-33°-W	163	109	25	縄底状	無	人為		縄文織土器	> SK165
SK165	B2	横内形	N-30°-W	0(1)	48	25	縄底状	無	人為		縄文織土器・糸織文土器	< SK164
SK166	D,I2	横内形	N-54°-W	180	153	42	縄底状	無	人為			> P109, > I12
SK167	F6	円形	N-80°-W	65	57	21	縄底状	無	人為			
SK168	F6	横内形	N-2°-W	80	55	12	土状	無	自然			> SK01
SK169	F6	横内形	N-53°-W	(174)	135	31	土状	無	人為			< SK01
SK171	F6	横内形	N-31°-W	0(0)	57	15	土状	無	人為			< SK01
SK172	F5	不整形	N-24°-W	(116)	149	13	土状	有	自然			< SK01
SK173	G6	不整形	N-30°-E	86	57	29	土状	無	自然		縄文土器中期か	> SK174
SK174	G6	不整形	N-32°-W	(45)	0(0)	28	縄底状か	無	自然			< SK173
SK175	G5	横内形	N-65°-E	210	186	22	土状	無	人為			
SK176	F5	横内形	N-75°-E	153	118	19	土状	無	人為			
SK177	F,G4	横内形	N-56°-E	107	75	29	不整形	無	人為	B		
SK178	G3	横内形	N-26°-E	148	97	18	土状	無	自然	A		
SK179	G3	横内形	N-64°-W	96	80	16	逆字形	無	自然	A		
SK180	F2	横内形	N-16°-W	150	94	14	不整形	無	自然	B		< P154
SK181	G2	円形	N-21°-E	(54)	98	19	土状	無	自然	A		> P178,I87
SK182	H2	横内形	N-53°-W	182	70	53	縄底状	無	人為	B		
SK183	H2	横内形	N-17°-E	78	60	16	縄底状	無	人為		縄文糸織文土器	
SK184	H3	横内形	N-68°-W	80	(55)	8	土状	無	人為	A・B		< SK21
P61	B5	横内形		63	45	15	縄底状	無	人為	A		
P89	B4	円形		90	70	20	逆字形	無	人為	B		
P90	B4	円形		61	0(0)	7	土状	無	人為	A		> SK101

\*SK04 - 07, 86, 59, 61, 74, 76, 95 ~ 98, 104, 105, 116, 123, 129, 130, 170 は欠番。SK59, 61 は縄文土器が出土しているが自然地形の落ち込みと判断。SK14, 16, 20 ~ 22, 24 ~ 26, 31 ~ 33, 78, 88, 102, 103, 133, 140 はビロへ。

\*\* 法量単位: cm

\*\*\* 遺物関係: (新しい遺物) > (古い遺物)。記号のないものは遺物不明。

表 4 ビット一覧表

番号	Gr	平面形状	長軸	短軸	深さ	断面形状	柱状部	柱口	分類	出土遺物	遺物関係
P01	D3	横内形	73	57	63	有段椀鉢状	有	有	B		> SK02
P02	B,C5	円形	51	40	19	土状	無	無	A		
P03	C5	円形	50	40	26	土状	有	有	B		
P04	C5	円形	59	54	20	椀鉢状	有	無	B		> P05
P05	C5	円形	60	50	29	土状	有	無	B		< P04
P06	C5	横内形	65	55	39	土状	有	無	C		
P07	B5	横内形	69	55	40	土状	有	有	B	縄文糸織文土器	
P08	C6	不整形	95	82	34	土状	有	有	C		
P09	C6	円形	65	58	32	縄底状	有	有	B		
P11	D7	円形	57	45	48	土状	有	有	B		
P12	D7	円形	(53)	30	21	土状	無	有	B		> P13
P13	D7	円形	48	30	29	土状	有	無	B		< P12
P14	D7	円形	45	43	18	縄底状	有	無	B		
P15	D7	円形	58	35	46	土状	有	無	B		
P16	D7	円形	48	39	21	土状	有	有	B		
P17	D7	円形	65	40	21	土状	有	無	B		
P18	D7	円形	79	63	22	土状	有	無	B		
P19	D7	横内形	48	40	41	土状	有	有	B		
P20	D6	横内形	40	35	33	土状	有	有	B		
P21	C5	円形	58	54	59	土状	有	有	B		
P22	D4	横内形	47	46	26	有段椀鉢状	有	無	B		
P23	D4	横内形	52	43	21	縄底状	有	無	B		
P24	D4	円形	58	55	23	縄底状	有	無	B		
P25	D4	円形	52	(47)	24	縄底状	有	無	B		P26
P26	D4	円形	57	53	24	有段土状	有	無	B		P25
P27	D5	横内形	78	55	15	縄底状	有	無	B		
P28	D5	円形	96	96	29	有段土状	有	有	B		
P29	D5	横内形	45	40	24	土状	有	有	B		
P30	D5	円形	85	80	25	縄底状	有	無	B		
P31	D5	横内形	75	60	19	逆字形	有	無	A		
P32	D5	横内形	65	42	21	逆字形	有	無	B		
P33	D5	横内形	65	53	26	椀鉢状	有	無	B	縄文土器	
P34	D4	横内形	77	52	21	縄底状	有	有	B		
P35	D4,5	横内形	98	(53)	38	椀鉢状	有	無	B		SK58
P36	H4	横内形	90	70	23	土状	有	無	B		
P37	H5	円形	66	55	21	縄底状	有	無	B		SK92
P38	H5	円形	60	53	32	不整形	無	有	B		< SK63,G4
P39	D5	円形	80	72	49	土状	無	有	B		
P40	H5	円形	69	52	57	椀鉢状	有	有	B		

P41	D5	內形	46	36	46	U字状	有	有	B	
P42	D15	內形	60	60	21	竪底状	有	無	B	SK72
P43	F6	横内形	63	40	19	有段様狀	有	無	B	
P44	F6	內形	36	34	57	U字状	有	有	B	
P45	F5	横内形	37	35	19	蓋状	無	有	B	< P46
P46	F5	横内形	58	48	28	U字状	無	無	B	> P45
P47	F6	內形	70	60	12	不整形	有	無	B	
P48	F6	內形	59	53	39	膝狀	有	無	B	
P49	F6	內形	36	32	16	竪底状	有	無	C	
P50	F6	內形	47	37	11	逆台形	有	無	C	
P51	F6	內形	47	40	18	膝狀	有	有	C	
P52	F6	內形	55	(48)	13	蓋状	無	有	C	< P53
P53	F6	內形	50	45	21	有段U字状	有	有	C	> P52
P54	F6	横内形	74	47	15	竪底状	無	有	B	
P55	F5,6	横内形	92	69	14	竪底状	有	無	B	> P59
P56	F5	內形	49	37	24	U字状	有	有	B	P70
P57	F7	內形	80	82	37	膝狀	有	無	C	
P58	F7	內形	74	64	68	有段U字状	有	有	C	古墳前部
P59	F5	横内形	(96)	87	67	膝狀	有	有	C	< P55
P60	F7	横内形	103	80	44	有段膝狀	有	有	C	
P62	F5	內形	60	52	17	U字状	無	無	C	
P63	F5	內形	57	50	14	竪底状	無	有	B	< P64
P64	F5	横内形	(43)	53	17	U字状	有	有	B	> P63
P65	F5,6	横内形	60	58	29	U字状	有	有	B	> P66
P66	F5,6	內形	125	76	30	膝狀	有	有	B	古墳前部土器
P67	F5	內形	50	(49)	18	竪底状	無	無	B	F65
P68	F5	內形	60	63	18	竪底状	有	無	A	> P69
P69	F5	內形	75	(55)	16	竪底状	有	無	A	縄文土器
P70	F5	横内形	(30)	21	34	口一丁状	有	無	A	P56
P72	F5	横内形	80	50	22	蓋状	有	無	B	
P73	F4	內形	32	27	30	U字状	無	無	A	> SK66
P74	F, F5	横内形	(56)	(48)	28	竪底状	有	無	B	> SK84
P75	F5	横内形	88	(75)	23	竪底状	有	有	A	> SK86
P76	F5	內形	50	(33)	14	蓋状	無	無	B	< SK87
P77	F, F5	横内形	75	(58)	20	不整形	有	無	B	> SK89
P78	F5	內形	65	(65)	13	竪底状	有	無	B	> P79
P79	F5	横内形	128	(79)	18	不整形	有	無	B	< P78
P80	F5	內形	69	56	17	不整形	有	無	B	
P81	F4	內形	85	(70)	22	不整形	有	無	B	SK82
P82	F5,6	內形	39	39	16	U字状	有	無	B	
P83	F5	內形	64	57	14	蓋状	有	無	B	
P84	F5	內形	52	(43)	18	竪底状	無	無	B	< P85
P85	F5	横内形	80	60	19	竪底状	無	無	B	P67, > 84
P86	F5	內形	64	53	38	U字状	無	有	C	
P87	F4,5	內形	47	32	20	U字状	有	無	B	SK93
P88	F4	內形	60	53	51	膝狀	無	有	B	
P91	F4	横内形	58	45	51	口一丁状	無	有	C	
P92	F4	內形	92	85	25	蓋状	有	無	B	
P93	F5	內形	54	52	20	竪底状	有	無	B	SK94
P94	F4	內形	47	40	14	逆台形	無	無	B	
P95	F4,5	横内形	110	80	46	不整形	無	無	B	> SK108
P96	F5	內形	73	63	39	U字状	無	有	C	
P97	F5	横内形	(60)	44	55	U字状	有	有	C	SK139
P98	F4	內形	51	55	57	U字状	有	有	C	
P99	F3,4	內形	40	(30)	9	蓋状	無	有	A	< SK109
P100	F3	內形	86	71	13	蓋状	有	無	A	
P101	F3	內形	50	43	9	蓋状	有	有	A	
P102	F3	横内形	(94)	65	16	逆台形	無	無	A	> SK110, < 111
P104	F3	內形	44	42	16	膝狀	有	無	B	
P105	F3	內形	(44)	45	16	不整形	有	有	B	
P107	D3	內形	59	(50)	17	蓋状	無	無	B	< SK119
P108	F3	横内形	71	60	24	U字状	有	有	B	
P109	D, F2	內形	(60)	95	35	竪底状	無	無	B	< SK166
P110	D2,3	內形	53	50	34	逆台形	無	有	B	
P112	D2	內形	(60)	64	42	不整形	有	有	B	< SK166
P113	D3	內形	73	58	22	不整形	有	無	B	> SK146
P114	C2,3	內形	45	(36)	12	逆台形	無	無	B	< SK149
P115	C2	內形	29	29	17	U字状	無	有	B	
P116	D2	横内形	65	55	29	竪底状	有	無	B	
P117	D2	內形	75	75	37	U字状	有	有	B	
P118	D2	內形	54	52	28	U字状	無	有	A	縄文系粗文土器
P119	D2	內形	61	55	29	竪底状	有	有	B	> SK155
P120	D2	横内形	75	(60)	27	竪底状	有	無	B	< SK155
P121	F3	內形	56	50	29	U字状	有	有	B	
P122	F2	內形	51	50	29	U字状	有	有	B	
P123	F, C2	横内形	85	65	42	竪底状	有	有	B	縄文系粗文土器・逆右器
P125	F6	横内形	57	35	11	蓋状	有	無	B	
P126	F6	內形	41	39	13	U字状	有	有	A	
P127	F6	內形	50	41	21	U字状	無	有	B	
P128	F5	横内形	36	29	16	膝狀	有	無	B	
P129	G5	內形	38	34	19	U字状	無	無	B	
P130	G5	横内形	66	46	32	U字状	有	無	B	

P131	G5	円形	44	43	14	U字状	有	無	A	
P132	G5	円形	45	48	21	U字状	有	無	A	
P133	G5	円形	35	34	21	U字状	有	無	B	
P134	G5	円形	47	44	17	U字状	有	無	B	
P135	G5	楕円形	53	(42)	22	U字状	無	無	B	< P136
P136	G5	円形	52	(44)	15	楕圓状	有	無	B	> P135
P137	F5	楕円形	58	45	12	逆右形	有	無	B	
P138	G4	円形	(36)	38	17	楕圓状	無	無	B	< P139
P139	G4	円形	35	37	17	楕圓状	有	無	B	> P138
P140	G3	円形	30	48	17	U字状	有	無	B	
P141	G4	円形	40	33	13	楕圓状	有	有	B	
P142	G4	円形	(65)	63	11	逆右形	有	無	B	
P143	F4	楕円形	56	48	16	不整形	有	無	B	
P144	F,G3	楕円形	80	66	52	楕圓状	有	有	B	
P145	F3	楕円形	28	62)	20	不整形	有	無	B	
P146	G3	楕円形	47	39	19	U字状	有	無	B	P191
P147	G3	円形	80	35	14	楕圓状	有	無	B	
P148	F3	円形	49	47	20	楕圓状	有	無	B	
P149	F2	円形	50	50	23	U字状	有	有	B	
P150	F3	楕円形	74	53	71	ロート状	有	有	C	
P151	G3	不整形	65	(34)	46	U字状	有	有	B	< P152
P152	G3	不整形	(45)	37	22	楕圓状	無	有	B	> P151
P153	F3	楕円形	70	61	19	楕圓状	有	無	B	
P154	F3	円形	59	54	22	楕圓状	有	無	B	
P155	F2	円形	47	40	20	楕圓状	有	無	B	> SK180
P156	F2	楕円形	60	50	15	逆右形	有	無	B	
P157	F2	楕円形	52	44	34	ロート状	有	無	B	
P158	F2	楕円形	(30)	60	37	U字状	有	無	B	< P159, > 193
P159	F2	円形	(47)	53	36	不整形	無	無	B	> P158, > 180
P160	F2	円形	(30)	45	34	楕圓状	無	有	B	< P159
P161	F2	円形	(45)	50	31	楕圓状	有	有	B	> P162,163
P162	F2	円形	41	(30)	30	楕圓状	無	有	B	< P161
P163	F2	円形	40	(37)	16	U字状	有	無	B	P161
P164	F2	円形	(45)	54	26	U字状	有	無	B	< P162
P165	F2	楕円形	90	65	21	楕圓状	有	有	B	
P166	F2	楕円形	52	42	25	U字状	有	有	B	
P167	F2	円形	54	53	28	有段U字状	有	無	B	
P168	G2	楕円形	55	41	17	楕圓状	有	無	B	
P169	G2	楕円形	50	43	12	楕圓状	無	無	B	
P170	G2	楕円形	63	47	30	楕圓状	有	無	B	> SK181
P171	G2	楕円形	84	55	30	楕圓状	有	有	B	
P172	G2	楕円形	76	50	19	楕圓状	有	無	B	P173
P173	G2	円形	(68)	70	14	楕圓状	有	無	B	P172
P174	G2	円形	49	45	15	楕圓状	有	無	B	
P175	H2	円形	(42)	50	17	逆右形	有	有	B	< P176
P176	G,H2	円形	52	48	18	逆右形	無	無	B	> P175
P177	H2	円形	51	(45)	14	楕圓状	無	無	B	> P178
P178	H2	円形	44	(32)	16	楕圓状	有	無	B	< P177, < 179
P179	H2	円形	58	(46)	17	楕圓状	有	有	B	> P178
P180	H2	円形	42	40	22	楕圓状	有	無	B	
P181	F2	円形	43	45	25	U字状	有	有	B	P182
P182	F2	円形	(62)	50	25	楕圓状	有	無	B	> P164,181
P183	H2	円形	65	57	14	楕圓状	有	無	B	
P184	H1,3	円形	(55)	55	30	U字状	有	有	A	縄文群石・地石
P185	H1,3	円形	52	50	13	楕圓状	有	無	B	> S201
P186	I3	楕円形	40	32	21	U字状	有	有	B	
P187	G2	楕円形	85	65	49	有段U字状	有	有	B	
P188	I3	不整形	(20)	45	12	U字状	有	無	B	SK181
P190	F3	円形	51	44	14	楕圓状	無	無	B	
P191	F3	円形	39	(35)	15	楕圓状	有	有	B	P145
P192	I3	円形	53	47	54	ロート状	有	有	B	
P193	F2	円形	(36)	40	23	楕圓状	有	有	B	< P158
P194	D2	楕円形	94	70	40	楕圓状	有	有	B	> SF91
P195	D2	楕円形	70	40	40	不整形	無	有	B	> SF91
SK14	H,C5	方形	110	85	67	ロート状			C	古墳中期前
SK16	C6	楕円形	81	60	34	楕圓状			C	
SK20	D6	円形	74	60	46	楕圓状	有	A		
SK21	C,D6	不整形	85	83	60	楕圓状			C	
SK22	D6	不整形	70	51	71	U字状			C	
SK24	D6	楕円形	103	95	53	U字状	有	C		
SK25	C7	円形	97	89	57	楕圓状	有			
SK26	D7	角丸方形	85	65	44	U字状			A・B	
SK31	D7	角丸方形	102	85	71	不整形	有	C		
SK32	D7	不整形	88	70	56	有段U字状	有	C		
SK33	D7	不整形	73	56	53	有段U字状	有	C		
SK78	I6	楕円形	78	60	29	U字状	有	A		
SK88	F5	不整形	109	98	74	不整形	有	C		
SK103	F4	不整形	108	82	110	U字状	有	C	中定世土器	
SK133	I3	楕円形	117	75	53	ロート状	有	C		
SK140	D,E3	円形	(50)	(42)	23	有段楕圓状			B	> SK141

\*P10, 71, 103, 106, 111, 124, 138, 196, SK102は欠番、P103は縄文土器、P124は縄文群石が出土している覆土と判断、P61, 89, 90は土坑へ。

\*\* 法量単位：cm

\*\*\* 重複関係：(新しい遺構) > (古い遺構)、記号の△・○は重複不明。

## 付載 第4号竪穴住居跡出土絵画土器について

日本考古学協会・元千葉市教育委員会 菊池健一

### 出土した絵画土器

前章でも触れられている様に、本資料は環濠掘削前に構築された第4号竪穴住居跡の覆土下層の焼土上に2か所に分かれて検出された。時期は弥生時代中期後半の宮ノ台式、つまり、市原市の根田代1期(参1)に当たると考えられる。

### 絵画土器理解にあたって

佐原 真氏は畿内での絵画土器は銅鐸絵画との関係から発生し、上限は畿内第Ⅲ様式に始まり、下限は銅鐸祭祀の終焉する畿内第Ⅴ様式までとされる(参2)。それは、絵画土器が抽象化されて、第Ⅴ様式以降に記号となるからである。これを鳥形に例えて解説すると、韓国では「いにしえより非常に神聖な存在として扱われてきた。つまり、鳥は天空を飛び回りながら、天と人間を結び付けてくれる媒介であり、天の化身として豊穰をもたらしてくれるもの」という(参3、註1)。つまり、その時代を背景にある共通理解を、まずは鳥という絵によって表現することに始まり、ついで絵に現される意味をシンボル化した三叉文記号となったと理解できる。

### 単独で表される絵画と並列して表される絵画

土器に絵画を描く方法は単独で表される場合といくつかの絵画が並列して描かれる場合とがある。後者を並列的構図という。和唐地遺跡はいくつかの絵画が集まって描かれる並列的構図である。唐古・鍵遺跡を調査した藤田三郎氏によると、同遺跡を中心とした畿内では並列的構図が多いとされる(参4、図27 参16より転載)。

畿内以东での並列構図は、東海圏では三重県の鈴鹿市土箕田遺跡の壺形土器の肩部に「鹿・狩人・鳥？」(参2)。津市六太A遺跡の台付壺の肩部に「龍と蛇」(参5)、松阪市(旧一志郡隣野町)小谷赤坂遺跡の壺に「鹿・舟」(参6)が描かれている。静岡県では浜松市角江遺跡の口縁部に「連なる鹿」が描かれた甕と「龍と矢印？」が描かれた壺がある(参7)。北陸の弥生時代中期後半の小松市八日市地方遺跡で「シカの群れと狩人が描かれた」例や、新潟県では加茂市石川遺跡出土と伝えられる古墳時代前期の埴に「猪？・狩人」が描かれている(参8)。関東では弥生中期後半の「鹿・人？・鳥」が描かれた稲荷台地遺跡群引地脇遺跡第1地点出土の壺(参9)、後期末の山下上遺跡に「鹿と鹿に矢を射かける人？」が描かれた甕(参10)、中期後半の壺に「鳥と円」が描かれた逗子市持田遺跡の例が知られる(参11)が、土器に絵を描くことは希少であり、さらに並列例は希少である。



図27 唐古・鍵遺跡22次SK-101  
絵画土器001  
(田原本町教育委員会)

### 土器製作と記号線刻の関係・描法

和唐地遺跡例の記号は粗製の小型鉢の胴部の内・外面に描写されており、絵画・線刻を、土器を作り上げてから描いたものではなく、焼成前に描いている。土器の器面はハケ調整を施し、さらに絵を描くために

器面をナゲ調整する。施文工具は線刻を観察すると沈線の中に条線と末端には「U」字状の当たりが見られるため、細い竹管状の工具を用いたものと推定される。沈線の描き方を見ると左からの右への工具の移動が認められ、後に述べる意匠の流れ（並列的構図）にも左から右への流れが認められる。つまり、本土器の製作者は右利きと考えられる。

絵画を何のために描くのかについて、藤田(参4)は「まず、描く目的は第三者に絵画を見せるためではなく、土器に絵画を描く行為が重要であって、土器に絵画の持っている意味を封じ込める行為。つまり、土器製作者が、その後に執り行われる祭祀の内容を想定して土器を作り、絵画を描いたもので、マツリ場に供えられた後は、日常の土器として利用される」。祭祀の終了した後、「日常の土器として使われる時に初めて他者の目に触れるわけで、描かれた絵画・記号に共通認識があるとすれば、その意味は他の人にも通じるはずである。」と言う、本資料にも同じ意味があったと理解できる。

### 記号の意匠

弥生時代から古墳時代の絵画の素材には、人と動物（鳥・鹿・スッポン・魚）、器財（建物、船、武器）、空想上の動物である龍がある（参12）。本資料には以下の6つの絵画が並列して描かれていると理解できる。以下に各意匠について解説する（註2、図29）。

記号1：右向きの魚が描かれる。右側が魚の頭で、左側に尾鰭の表現が見られる。類例には唐古・鍵遺跡第48次調査SX-1102 絵画土器089（魚）〔参16p.46〕等がある。

記号2：胸部外面上半に大きく2連の逆「U」字形を線刻し、この逆「U」字形直下に鳥の象徴とされる下向きの三叉文を描き、2つの記号が縦列に組み合わせられている。類例としては逆「U」字形の描かれた唐古・鍵14次SK-106 記号土器038（曲線：H-C<sub>1</sub>）〔同p.67〕と三叉文が描かれた同33次SD-109 記号土器030（直線：H-B'）〔同p.65〕があり、両記号が組み合わせられたものと推定される。

記号3：やや斜行する逆「U」字形と斜行する線刻が組み合わせられ、直弧文とみることもできようが悩むところである。類例としては唐古・鍵63次SK-106 記号土器078（直線・曲線の組合せ：H-E'）〔同p.77〕が挙げられる。

記号4：左側に5条、右側に6条、外殻上下を区画し、左側に頬を表すような線刻が見られるが、目らしい表現は認められない、黥面表現とみてよいただろうか（註3）。弥生時代の黥面表現の古い例は、前期の香川県大川郡志度町鴨部川田遺跡に認められる（参13）。

記号5：縦線10条、横線2条の組み合わせで春成秀爾分類の建物を表現しているようだ（参13 p.19, 註4）。市内では、花見川区檀橋町本郷向遺跡で古墳時代前期の住居跡から出土した壺に描かれた線刻画がある（参17、図28参15 菊池2010より転載）。類例としては唐古・鍵73次SD-103 絵画土器005（建物）〔同p.22〕が挙げられる。

記号6：土器の内壁にある三叉文は、記号2と同様に鳥を記号化したものと理解できる（参12）。記号土器の中でも類例は多い。

### 絵画土器の意義

冒頭で触れたように、土器に絵画・記号を描く背景には弥生時代の銅鐸に絵を描く風習が根底にあり、土器に反映されたと理解されている（参14）。絵画・記号土器は畿内、唐古・鍵遺跡I期、つまり、弥生時

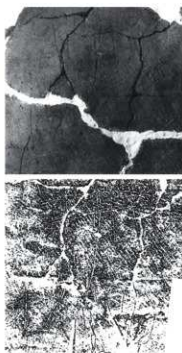


図28 千葉市本郷向遺跡例  
（縮尺約2分の1）

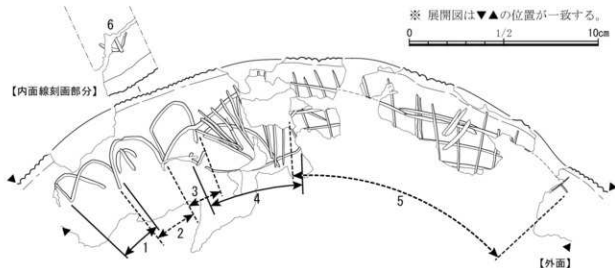


図 29 第 4 号 竪穴住居跡出土土鉢 4 の線刻面の各意匠

代前期に始まり、畿内圏では弥生時代の終わりとともに途絶えたとされている。絵画・記号土器の拉がりは九州から関東に及ぶ範囲で確認されており、関東圏では橋本裕行・諸橋千鶴子両氏が研究されている（参 17～20）。

関西圏を起源とする絵画土器が関東圏に波及した弥生時代中期後半のこの時期は、農耕社会が構築される段階である。今回の調査によって絵画土器が環濠構築直前の段階に千葉市の本道跡で発見されたことは、以上述べてきた絵画土器の持つ意味の重要性もさることながら、地域にあっての意味を考える上で重要であり、本調査によって得られた貴重な成果の一つと言える。本稿では調査成果の一つを解説したが、より深い考察は次の機会に行う予定である。（2023 年 12 月 1 日脱稿、18 日修正）

#### 調査協力者

田原本町教育委員会、藤沢市教育委員会郷土歴史課、石川日出志、植木武、宇都洋平、小林嵩、齋藤弘道、設楽博己、清水琢磨、菅崎幸一、高花宏行、中島郁夫、藤田二郎、穂積裕昌、諸橋千鶴子（50 音順、敬称略）

#### 註

- (註 1) 「三国志」魏書東夷伝の弁辰条「破寒禮俗男女有別 以大鳥羽送死其意欲使死者飛揚」婚姻や礼儀、風俗に男女の区別がある。大鳥の羽を使って死者を送る。死者を高く飛び上げらせよと望んでそうするのである。」とあり、死者の魂が天に昇るといのは北方系の発想で、記誌にも日本武尊が白鳥になって昇天するという記事がある。
- (註 2) ここで解説する各意匠は参考文献 16 の『唐古・畿道跡考古資料目録 1』と重合し、この枠で捉えきれない場合には参考文献 12・13・14 等と比較検討して解説した。この根底にある認識は「記号のあるところ、体系があるという理解があり、記号文の分布圏にあっては記号を通じて一つの共通認識があった。」(参 4) に共感する。  
なお、参考文献 16 は Web サイト「全国道跡報告総覧」で公開されているので参照願いたい（2023 年 12 月 1 日閲覧）。  
<https://sitereports.nabunken.go.jp/88769>
- (註 3) 黠面表現とみる解釈は、2023 年 10 月 29 日に開催された国立歴史民俗博物館友の会 2023 年度第 1 回考古学講座「顔の古代史」の折、講師を務めた設楽博己氏に伺ったところ、土器を反転させて見た場合、上下の弧線が顔の輪郭線、放射線の表現が黠面表現と理解できる。また、黠面表現の起源は縄文時代中期の黠面表現につながるのとご教授をいただいた。
- (註 4) 基本的には春成秀爾氏の高床倉庫から直線形記号へ（参 13）の系列上に沿って理解できるとも考えられるが、本地域における変容の姿として「欄」等を表しているとも理解した。また、本年 11 月 20 日に諸橋千鶴子氏より格子状の意味について伺ったところ、「格子はドーマン（蘆屋遺蹟の印型）に由来し、これは平安時代の陰陽師のことですが、遙か弥生時代にもその原型が迫れるのではないかと考える。伊勢や志摩地方の海女は海難から身を守るために、これらの印型を手拭等に縫い付けて海に漂ったという民俗例が残っており、格子は身を守る、災いを遠ざけるという意味かと思います。」とのご教授をいただきました。その背景を通して物を見るという考え方を尊重したく、ここに掲載する。

## 参考文献

- (参1) 財団法人市原市文化財センター 2005『財団法人市原市文化財センター調査報告書92：市原市根田代遺跡』財団法人市原市文化財センター
- (参2) 佐原 真 1980「弥生時代の絵画」『考古学雑誌』第66巻第1号
- (参3) 朴正守 2004「文化の場」『大成洞古墳博物館展示案内図録』p.51
- (参4) 藤田三郎 1982「弥生時代の記号」『同志社大学考古学シリーズⅠ 考古学と古代史』p.133
- (参5) 徳積裕昌 1995「絵画土器 見つかる！！」『三重県埋文センター通信 みえ』No.16
- (参6) 原田忠理子 1998「この絵何の絵？」『三重県埋文センター通信 みえ』No.25
- (参7) 佐野五十三他 1996『静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告69：角江遺跡Ⅱ 遺物編1（土器・土製品）【別冊図版】』財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所 第112図
- (参8) 伊藤秀和 2022「伝石川遺跡出土の古墳時代線刻画甕書」『加茂郷土誌第40号』
- (参9) 安藤広道編 2011『大地に刻まれた藤沢の歴史Ⅲ～弥生時代～』藤沢市
- (参10) 山神下遺跡発掘調査団 1989『山神下遺跡』相武考古学研究所
- (参11) 赤星直忠 1975『逗子市文化財調査報告書第6集 持田遺跡調査報告書（本文編）』
- (参12) 金岡恕・春成秀爾 2005『道具の考古学—佐原真の仕事2』岩波書店  
金岡恕・春成秀爾 2005『美術の考古学—佐原真の仕事3』岩波書店
- (参13) 春成秀爾 1991「絵画から記号へ」『国立歴史民俗博物館研究報告』第35集
- (参14) 佐原 真 1997『歴史フォーラム 銅鐸の絵を読み解く』小学館
- (参15) 菊池健一 2010「千葉市出土の絵画文土器」『房総の考古学 史館終刊記念』  
菊池健一 2020「樂に描かれた絵画」『佐倉市史研究』第33号
- (参16) 藤田三郎 2015『唐古・継道跡考古資料目録Ⅰ 土器編1（絵画・記号・文様）』田原本町教育委員会
- (参17) 橋本裕行 1988「東日本弥生土器絵画・記号総論」『橿原考古学研究所論集』第八
- (参18) 諸橋千鶴子 2009『赤坂遺跡』三浦市教育委員会
- (参19) 諸橋千鶴子 2015「第14次調査B1地点出土記号文土器について」『赤坂遺跡』赤坂遺跡調査団
- (参20) 諸橋千鶴子 2023「土器に見る記号文について再考」『横須賀考古学会 研究紀要』第10号
- (参21) 田原本町教育委員会 2009『弥生の絵画～唐古・継道跡と清水風遺跡の土器絵画～』田原本の遺跡4





写真図版

1. 調査風景（第1号壘穴住居跡）



1. 調査区全景

(上が北)



1. S101 遺物出土状況

(南東から)



2. S101 Aセクション

(西から)



3. S101 遺物出土状況

(北東から)



4. S101 完掘状況

(南東から)



5. S101 P1セクション

(北東から)

写真図版 4



1. S102 完掘状況

(南東から)



2. S102 セクション

(北から)



3. S102 遺物出土状況

(東から)



4. S102 P2 完掘状況

(南東から)



5. S102 炉 遺物出土状況

(南から)



1. SI03 完掘状況

(南東から)



2. SI03 セクション

(南東から)



3. SI03 遺物出土状況

(東から)



4. SI03 P1 完掘状況

(南東から)



5. SI03 P2 完掘状況

(南東から)

写真図版 6



1. S104 完掘状況

(南東から)



2. S104 遺物出土状況

(北東から)



3. S104 P1 完掘状況

(西から)



4. S104 絵画土器(南群)出土状況(北東から)



5. S104 絵画土器(北群)出土状況(北東から)



1. SD01 完掘状況 (C区。左手は第4号竪穴住居跡) (北西から)



2. SD01 高杯5出土状況 (南から)



3. SD01 Fセクション (南東から)



4. SF01 検出状況 (南東から)



5. SX01 完掘状況 (北西から)

写真図版 8



1. SZ01 完掘状況

(上が北)



2. SZ01 完掘状況

(南から)





1. SZ01 周溝 B セクション 北東 (西から)



2. SZ01 周溝 B セクション 南西 (南東から)



3. SZ01 周溝 B セクション 南西 (北西から)



4. SZ01 周溝 B セクション 北西 (北東から)



5. SZ01 埋葬施設 木棺掘方完掘状況 (西から)



6. SZ01 主体部 B セクション南半 (南東から)



7. SZ01 埋葬施設墓域完掘状況 (西から)

写真図版 10



1. SK01 セクション (南東から)



2. SK01 完掘状況 (南西から)



3. SK03 セクション (東から)



4. SK03 完掘状況 (南から)



5. SK08 セクション (北西から)



6. SK08 完掘状況 (南西から)



7. SK14 セクション (南西から)



8. SK14 完掘状況 (東から)



1. SK41 セクション (西から)



2. SK41.42 完掘状況 (南から)



3. SK88 セクション (南から)



4. SK88 完掘状況 (東から)



5. SK103 セクション (南から)



6. SK103 完掘状況 (東から)



7. SK151 セクション (北西から)



8. SK151 完掘状況 (南西から)

写真図版 12



1. SK153 セクション (南東から)



2. SK153 完掘状況 (北から)



3. SK162 セクション (西から)



4. SK162 完掘状況 (南から)



5. SK163 セクション (南西から)



6. SK163 完掘状況 (南から)



7. SK164 セクション (南から)



8. SK164 完掘状況 (南から)



1. P7 セクション (南西から)



2. P7 完掘状況 (南から)



3. P21 セクション (南西から)



4. P21 完掘状況 (南から)



5. P33 セクション (南から)



6. P33 完掘状況 (南から)



7. P65.66 セクション (北東から)



8. P66 完掘状況 (北から)

写真図版 14



1. P118 セクション (北東から)



2. P118 完掘状況 (南から)



3. P184 セクション (南東から)



4. P184 完掘状況 (南から)



5. SK13 遺物出土状況 (南から)



6. SK13 セクション (東から)

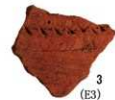


7. 基本層序 (西から)

縄文時代土坑



縄文時代遺構外



第2号竪穴住居跡 (1)



写真图版 16

第2号竖穴住居跡 (2)

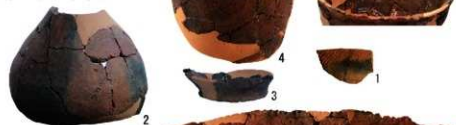




第3号竪穴住居跡



第4号竪穴住居跡



弥生時代土坑



4の外面展開写真 (S=1/2)



環濠跡



## 報告書抄録

ふりがな	ちばし わとうじいせき						
書名	千葉市和唐地遺跡						
副書名	宅地造成に伴う埋蔵文化財調査報告書						
巻次							
シリーズ名							
シリーズ番号							
編著者名	長谷川秀久						
編集機関	株式会社ノガミ 関東支店 埋蔵文化財調査部						
所在地	〒286-0045 千葉県成田市並木町221 TEL : 0476-24-3218						
発行年月日	令和6年(2024)3月31日						
ふりがな	ふりがな	コード		経緯度	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号				
和唐地遺跡	中央区星久喜町938ほか	12101	中央区 47	北緯 35° 36' 05" 東経 140° 08' 46"	20221208 ～ 20230524	3,400 m <sup>2</sup>	宅地造成
所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項	
和唐地遺跡	集落	縄文時代	土坑・ピット		土器・石器	木葉型尖頭器	
	集落	弥生時代	竪穴住居跡3軒・環濠跡1条		土器・石器	環濠集落・絵画土器	
	集落	古墳時代	竪穴住居跡1軒・古墳1基		土器	円墳(中期)	
	包蔵地	奈良・平安時代			土器・灰軸陶器		
	包蔵地	中・近世			土器		
要約	<p>1 縄文時代 草創期の木葉型尖頭器や土坑に伴い早期・条痕文系(茅山式)を主体として前期・浮島式、中期・加曽利E式、後期・加曽利B式土器がわずかに出土。</p> <p>2 弥生時代 市域2例目となる環濠集落(中期・宮ノ台式)を確認。竪穴住居跡からは絵画土器が出土。また、荒海式とみられる土器を検出した。</p> <p>3 古墳時代 古墳時代前期の竪穴建物跡1軒を検出。台地最高所で中期の円墳を確認した。</p> <p>4 奈良・平安時代～中・近世 土器・灰軸陶器がわずかに出土。</p>						

## 千葉市和唐地遺跡

—宅地造成に伴う埋蔵文化財調査報告書—

2024年（令和6）3月31日発行

編	集	株式会社ノガミ 〒286-0045 千葉県成田市並木町221 電話 0476-24-3218
発	行	千葉市教育委員会 〒260-0025 千葉市中央区間屋町1-35 電話 043-245-5962
印	刷	株式会社ライフ 〒286-0044 千葉県成田市不動ヶ岡1128-15 電話 0476-24-1564